○御和讃正像末和讃に曰く彌陀の名號となへつゝ信樂まことにうるひとは憶念の心つねにして佛恩報するおもひあり
○唯除睡時觀經地想觀の文なり

やうの相かはらぬことをいはふとて。常の如しと書く。この常がかの相續常にあたる。今「唯能常」と仰せられ。御和讃に「憶念の信つねにして」と仰せられたも同じ道理で。いかに御恩を忘れぬはどにとて。體に脉のうち川水のながれて。暫も止ぬ如く。御恩を思ひつゞけにもならす。念佛申しつめにはならねとも。御經に「唯除睡時」とあれは。寐た間は御容赦。覺て居うちも。士農工商の世わたりはさま〳〵なれは。奉公する身は主人の用に暇がなし。商ひする身は商賣が忙がしゝ。其中からでも。心がけたらは念佛の申されぬではあるまひけれとも。胸の中にみち〳〵た煩惱妄念に阻てられて。御恩を思ひ出すことはたへ〳〵なれとも。一たび御廻向の信を領解した身の忝なひは。思ひ出す度ごとに。煎じやう常の如く。御助け一定うれしや南無阿彌陀佛。この喜びの模樣のいつもかはらぬ處を。「唯能常」と仰せられた。愛を善導大師は。「不隔念。不隔時。不隔日。使常清淨」。亦名「無間修」と仰せられて。間が有ても。後起前得に繼て。念

○無修間の三種

佛の中へ雜行雜修のまじらぬが相續常。即ち無間修と云ふものぢや。爾この無間に上中下根の三つがあて。法然上人の一日に七萬遍の稱名。又は蓮如上人の御願を測あひたも御唇の動きやまなんだやうなは。念をへたてぬと云ふもの。第二に時を隔てずとは。睡間は各別。晝のうち起てゐる間は。一時々々思ひ出して御恩を喜ふ。これは時を隔てぬと云ふもの。第三に日を隔てずとは。朝御禮申してから。晩までわすれて居るやうな懈怠なもの。やう〳〵日が暮れてから。御前へ參りて。さて〳〵淺間しや。今日も一日世事に紛れまして。御恩のことも思ひ出さず。せめて一遍の御報謝も申し上ませなんだと。自ら慚ち入りて。心の中に懺悔するやうなは。いはゆる太ひ御無沙汰。ほめられぬことなれとも。夫でも一日に兩度の御禮はかゝさず。又日に由りては。御緣にあふて度々思ひ出すこともあて。昨日も今日も信心相續の模樣のかはらぬ處は「不隔日」と云ふもの。この三つの中で。各々我等は多くは三番目の下根仲眞。忘れてばかり居ものなれ

○即今云云
蓮如上人の御言葉なり
○錦織の紋の喩

とも。御同向の信心を下された験には。去年の喜ひも今茲の喜びも。昨日も今日も。領解の變らぬやうに成りて。いつ思ひ出しても往生治定。南無阿彌陀佛。行者の三業はつねに間斷するに似たれとも。攝取の慈光は時として照さすと云ふことなし。我方にわするゝ際のおはけれと。ちかひて彌陀の身をははなれす。此方はおはやう無沙汰。申し分もなひ仕合なれとも不斷光の御利益で。大悲の御念力斯須もたへまなく。護つゝけて下さるゝゆへ。「即今時々念佛すとも。常念佛の衆生にてあるべく候。」喩へは錦金襴などの織ものに。菊や牡丹の模様か織つけてある。表から見れは其紋かひとつ〳〵はなれてあれとも。裏から見れは。紋のなひ處に一面に絲がわたりてある。裏樓がわたりてあるので。表へ紋があらはれる。我等がをりをりの念佛は。菊や牡丹の紋ところ。はなれ〳〵に見ゆれとも。他力同向の裏からながひれは。不斷光の御利益で間斷なく御慈悲の絲すじがくゝりて在すゆへ。懈怠がちな我等か。おり〳〵は御恩のありがたさを思ひ出す。

其思ひ出す稱名の紋どころは。皆如來の大悲から織り付て下されたのぢやに由て。設ひ時々の念佛も。御慈悲の裏からながめたれは。直にそれが常念佛の道理にてある。こりや好こと開たと。得手に組て。ます〳〵懈怠に成りたらは。夫は不信心の正銘。まことの喜ひではなひ。此のやうな者を常念佛ぢやと御あしらひ下さるゝ。餘りと申せは勿體なやと。及はぬ迄も御冥見に慚て。厠み喜ふ心に成りたらは。夫れが即ち眞實信心常念佛の行者にてある。

天親菩薩造論說。歸命無碍光如來。

○天親と云ふ名の事

是より下の六行十二句は。七高僧の第二祖。天親菩薩の御德を讃嘆し給ふこの菩薩は佛滅後九百年に當りて。北天竺富婆沙羅國と云ふに御出世なされた。翼天竺語に婆藪盤豆と云ふを。此の語に譯して天親と云ふ。何天親と申し奉るなれは。天竺に婆藪天と云ふ神の祠か有て。其みぎり人々擧てこの神を信向した。然るに天親の父この神に禱りてまふけられたゆへ。神

○同腹同し母親のことなり

の號をかたどりて。婆數盤豆と申した。同腹の令兄に。無着菩薩と云ふかあり。令弟に獅子覺菩薩と云ふが有りた。因緣こそありつらん。御兄弟三人ながら御出家なされたが。伯叔もたゝ人ではなかりた。時に長兄の無著菩薩は。大乘の法を歸依なされ。仲子の天親菩薩は。小乘菩娑多の流れをつたへ給ひた。おほよそ佛法に大小乘のかはりが有りて。同じ佛說なれども。一法界の道理をさとりて。廣く佛法の深義を領解するは。大乘敎又同し事をせばめて細小ふ心得るを小乘と云ふ。それゆへ大乘は勝れ小乘は劣る。爾然る處かの天親菩薩。初めのほどは一途に小乘の法を信し給ひ。長兄の無着菩薩の修し給ふ大乘の敎を。さん〳〵誹謗なされた。然るにある時天親菩薩。諸國行脚をなされてあるが。ある大伽藍の山門の下にゆきくれ給ひ。今宵一夜をあかさんとし給ふ處に。山門の二階の上に於て。五六人の出家が集りて。華嚴經の講釋をせらるゝ。この華嚴と云ふは。大乘修多羅の中にも。殊にたふとひ六大無碍の法門なるを。殊勝にものがたりせら

○薩婆多有部宗として三世實有法體恒有を立つる宗也

○天親菩薩廻心向大の因緣

○修多羅此に契經或は法本と云ふ

るゝを聞き給ふ處が。皆令兄の無着菩薩の御弟子ぢや。天親菩薩それを御聞きなさるゝと。舉身ありがたふなりて。さて〳〵今までは誤了た。斯るたふとひ大乘の法を謗たことの悔しさよ。この罪を何とかはせん。せめてのことに此の謗りた三寸の舌を切て佛へ御託を申し上んと。やがて匕首を持ちて。舌を切ふとなされたれは。不思議や誰ともしれず。虛空の中より。しはら〳〵と喚はるは。汝れもなひ長兄の無着菩薩の御聲。天親菩薩ふり仰ひで御覽なされたれは。無著菩薩。光明赫奕として空中に立ち給ひ。汝其舌を切ふと思ふかやがて狹ひ小乘根性。大乘の法は左右したゆきつまりた事ではなひ。今までの謗りた舌を以て。大乘の法を讃よ。舌切ることかたく無用と。さし止め給ふ御ことばの下に。いよ〳〵大乘甚深の道理をさとり給ひ。夫より小乘の數珠切りて。大乘に入らせられたが。凡そ御一代に大乘論五百部。小乘論五百部。合せて千部の論を造らせられた。其大乘論の中で。別して御本意となさるゝは往生論一部。これは淨土の三

部經に據り給ひて。他力回向の一心。凡夫往生のことはりを。莫直に御勸めなされた。天竺と我朝と。凡そ十萬里程。山海遙にへだてたれども。在座の面々雜行すて〻一心一向。わき目をふらす御助けの御恩を喜ぶ領解になられたは。全く天親菩薩の御勸化の。是れまて屆かせられた御蔭ぢや。そこを『釋迦の教法おほけれと。天親菩薩はねんごろに。煩惱成就のわれらには。彌陀の弘誓をすゝめしむ。』凡そ天親菩薩大小乘の論。みな本經多含の深義を訐き出して。論判なさるゝことなれは。何れにおろかはなけれとも。中にも分けて御念を入れられたは。三部經の意を通申し給ふ淨土往生論。其御すゝめなされやうが。各別に御ねんごろな。夫は其はづの事ぢや。大小乘一とはりの論と云ふは。みな智者上人對手。淨土論一部は。在家止住の凡夫を御あひて。對手があひてぢやに由て。御念が入た筈ぢや。

○釋迦云云高祖和讃の文なり

○手習の喩

譬喩へは手習の師匠が。兒輩に手本を書てやるに。高弟の分には。庭訓の今川のと云ふやうな横もの。六つ箇しひことを書てやる。夫はどの弟子は

手本さへ書て出せは。手を把りて教ひひでも能それを書く。さて昨日や今日登參した童亂の子供なとは。根から頑是がなひに由て。其やうな六つ箇しひ事はいけぬ。隨分假名の以呂波を書てやる。以の字の運筆。左から書くものやら。右から書くものやら。其術を知ぬに由て。草紙に爪形入れて其上を孳させたり。又は手を持てかゝせたりして。師匠が骨を折りて。格別念比におしゑる。今かちやうど其如く。大小乘の智者たちは。皆一器量ある御衆ぢやに由て。論を造りて貽し給ふも。其やうに箸取て哺るやうにならひでも。隨分御合點のゆくことなれとも淨土門の安心。他力往生の御勸化は。あひてが愚痴無智の凡夫ぢやに由て。並大底のことでは理會せまひと思召して。如來を頼みまして。極樂參りする安心の模樣を。手みぢかふ領解しやすひやうに。懇におしゑ下されたが。天親菩薩の御化導にてある。實「歸命無碍光如來」とは論に五念門を明し給ふに。因の五門。果の五門と云ふがある。其中で今は因の五念門を明し給ひた。即ち論に『歸二命盡

○歸命無碍光如來の釋

十方無碍光如來」とある二句。これが禮拜讃嘆の二門で。先づ禮拜と云ふは。如來に向ひ奉り手を合せて瞻仰低頭。若るいたづらものを。助け下されたる御姿ぞと存じて。飽まて御うやまひ申すが。即ち禮拜ぢや。是も儀式にする時は。五體投地と。我體を地に投て。禮拜するもあり。又佛足頂禮といへは。佛の御足を頂くこと。其やうな式作法もあれとも。今時では唯手を合せ。腰を拜めて禮し奉る。是が恭敬の姿ぢや。時に今歸命とある二字が。直に禮拜ぢやと。曇鸞大師の御釋なされた。然るにこの歸命と云ふは。本と意業の歸命で。心の内に阿彌陀如來。後生助け給へと。一念に賴み奉る信心のことぢや。又禮拜と云ふは。是は形ちにあらはしてのこと。夫に歸命が直に禮拜ぢやと仰せられては。間違ひではなひかと云ふに。そこを曇鸞大師の懇に御示なされて。「禮拜但是恭敬不二必歸命一。々々必禮拜」と仰せられた。姿形ばかりの禮拜では油斷かならぬ。確の上下と同しことで。確の竿。本か木でこしらへた物なれは。何はど昂たり低たりし

○この歸命は意業邪計の執なり天親の歸命なりと思ふ可らず

ても。何も性根はなひ。信心のなひ人の禮拜がそれで。何はどありがたさふに拜でも。肝心胸の中の領解が御留主なれは。そりや確の上下質にならぬ。姿容は兎も角も。胸の内の信心が正ぢや。信心さへあれは。是非とも形に御うやまひが顯はるゝ。夫ゆへ歸命を禮拜ぢやと仰せられた。『論語』に孔子の言をあげて。「事レ君盡レ禮。人以爲レ諂也」と云ふた。孔子か魯の君につかへて。懇懃丁寧に恭敬をのべらるれは。傍から觀てあれは諂ひぢや。さても面諂くさひと。わるさまに云ふ者も有りたれとも。孔子は聖人のことなれは。其やうに追從輕薄するやうな人ではなひ。大事の主君ぢやと思ふて。心一杯に敬まはるゝなれとも。邪曲なものが。我根性に比へて。其やうに思ふた者もある。夫は叱られぬ。孔子は聖人なれば格別の沙汰。其外はおはかた諂曲追從。主の氣どりして。物してやらふ。褒美にあづからふと云ふ。卑劣ひ心からするのが多ひ。主人も亦凡夫の淺猿さには。陰では悪口ふ云ふても。前ではかり御前さま。佛檀さまと云ふてゐ

○孔子拳公の事

れは。涎を流して悦んでゐる。是は互に凡夫同士ぢやに由て。誣しもするだまされもするが。今は如來聖人御あひてぢやに由て。其やうなうは皮ばかりで。内に實のなひは御受けなされぬ。禮拜といへは先つ信心の御吟味があるほどに。「禮拜恭敬不二必歸命一」これ〳〵油斷するな。兎角心の内の信心が肝要ぞと御しらせなされた。然れは姿にあらはしては。難有さうに見えても。思ひの外胸の中に信心のなひのがある。夫れではまことの禮拜でなひ。去るほどに但姿のうやまひばかりでは。往生の直うちは定められぬ。信心さへたしかに決定したれは。自然に禮拜恭敬の御うやまひが身に顯はるゝ。夫れこそ實の信者なれと敬ひ給はんが爲めに。歸命を以て禮拜と御定めなされた。爾次に無碍光如來とは。論に盡十方無碍光如來とある。即ちこれが贊嘆門。彼尊をほめ奉る言。「安樂淨土如來別號」とあれは南無阿彌陀佛の異稱。祖師聖人の「南無阿彌陀佛といふは。ほめたてまつる言なり」と御意なされて。口に稱ひあらはす報謝の稱名。褒るやら貶るやら。其差別は知らねとも。御助け一定の頼母しさに。如來の嘉號を稱ひ喜へは。直にそれが彼尊を稱め奉る讃嘆門。一度々々に大悲の御心にとゝひて。深〳〵御滿足なさるゝ。「隨二順名義一稱二佛名一」と仰せられたが爰ぢや何はと念佛の數をつむても。如來の御意にかなはねば。讃嘆門のほめ言にはならぬ。其念佛申しなから如來の御意にかなはすと云ふは。かの雜行雜修自力でゝろの離れぬものは。設ひ何はとに稱ひても。如來の御受はなひ雜行すてゝ側目をふらす。雜修を止て余所見せず。念佛を杖につく自力の心をさらりとすてゝ。往生は一念歸命の立處に。はや御約束のすむた身のうへなれは。但廣大の御恩を思ひつゝけて南無阿彌陀佛と稱ふるが。眞實如來の御意にかなふほどに。是を名けて讃嘆門と御定めなされた。火をたけはをのづから煙のしたがふ如く。心に信心の喜ひさへあれは。我しらす禮拜讃嘆等の御うやまひが身にも口にも顯はるゝ。何より以て信心が肝要ぞとの御勸化にてある。

○無碍光如來の釋
○安樂云云
論註に曰く無量壽是安樂淨土如來別號

○隨順云云
論註に曰く稱二彼如來名一、如二彼如來光明智相一如二彼名義一、欲二如實修行相應一故、

依修多羅顕眞實。光闡横超大誓願。

天親菩薩。往生論の偈に。「我依修多羅眞實功德相」とある文に依て。今の偈頌を顕はされた。〇修多羅とは天竺語。此に契經とも。法本とも翻譯して御經のことぢや。即ち天親菩薩の往生論一部は。淨土の三部經。大經觀經。阿彌陀經の意に依り給ひて。他力本願のありがたひ義を御のべなされた。〇依とは从レ人从レ衣た文字で。總して天地の間に生ある物。四足の類は毛を被て生れ。鳥翅の類は生れながらに羽をそなへ。其外甲を被鱗を紆たるもの。何れも自然と身に要害を具てゐれども。人間に限りて裸で生れて。身に要害がなひ。夫ゆへ衣服をこしらへて。身をかくさねはならぬ。夏は葛。冬は裘。しはらくも放すことはならぬ。今天親菩薩の。依修多羅と仰せられたがそこで。往生論一部の御すゝめ。極樂參りの御領解は。論主の私をまぜ給はず。大經。觀經。阿彌陀經。三部四卷の御經を身にきる衣服の如く。片時も癒し給はず。御經の通をありのまゝに。手みぢ

〇修多羅の釋

〇依の釋

かふ我等へ御勸化なし下さるゝと云ふことぢや。時にこの修多羅を譯して法本と云ふは。法は軌持の義で。近ふいへは手本のことぢや。手本とは何の手本ぞ。去れはこの三部四卷の經文は。我等が極樂參りする信心領解の手本ぢやと云ふことで法本と云ふ。夫ていよ〳〵ありがたひ。〇喩へは手習をおしゆる師匠が。高弟の分には六つかしひことを敎へ。幼少子供にはそれ相應に假名なことをてみぢかに書て與ふ如く。三ツ四卷の御手本のまゝでは。上人智者たちは會得し給へとも愚な凡夫はのみてみかねるに由て愚鈍の衆生解了しやすからしめんが爲めに。三を合して一とあそばされ。經の三信と云ふも。約めたれは行者歸命の一心。雜行すてゝ如來を賴むことと。これ此とはりと。論主の御身にあらはされて。「世尊我一心歸命盡十方」と。我等が解了やすひやうに。假名になをして敎へ下されたゆへ。何なる愚な我他も何の樣もなく。御助け候へと一念無疑に如來を賴めは。參らせて下さるゝことの難有やと。心易ふ往生を安堵するやうになりたは。偏に

○眞實功德相の釋

天親菩薩の大庇そと知らせ給ひて。「依修多羅顯眞實」と仰せられた。眞實とは具にいへは眞實功德相。これに廣略の異があて。廣く云ふときは極樂淨土の二十九種の莊嚴。宮殿樓閣。水鳥樹林。七寶八德。無盡の莊嚴寶のうゑきの杪葉一つ。八功德池の水一滴までも。皆阿彌陀如來の眞實功德より、かざり立て給ふに由て。夫を總て眞實功德相と申すことなれとも。若し略の方からいへは祖師上人の「眞實功德相とは。誓願の尊號なり」と御意なされて。即ち南無阿彌陀佛のことぢや。煩惱具足。火宅無常の世界は。よろつのことそらことたはこと。とまことある事なし。唯念佛のみそまことにては候へ。凡そ三界の分野は虛僞の相輪轉の相と名けて。依報正報何にもかも皆うそいつはりで。眞實なことはなひ。「ぎちりきなかたみに袖をしぼりつゝ。末の松山波こさしとは。」互にまことをいひかはして。いつゝ々迄もと思ふても。「百年同謝西山日。千秋萬古北邙塵。」人も死ぬれは我も死んて。灰となり土と化ては思ふたことも云ふたことも柄はなひ。

○祖師上人尊號眞像銘文の中に仰せられたる語也

○ちぎり云云元輔集の歌なり後撰遺に出づ

○百年云云劉延芝の公子行の句、唐詩選に出づ

○淨土云云述懷讚の文也

みな虛妄と成りてしまふ。殿命がつゝひても。凡夫の習。初めは眞實に思ひ入たことでも。末か遂にくひ。幾同か思ひさためてかはるらん。頼まゝきは我こゝろなり飛鳥川の淵。秋の夜の空。さりとては質にならぬ。此の心ては即今淨土を欣ふても。眞實の心はおこるまひ。「淨土眞宗に歸すれとも。眞實の心はありかたし。虛假不實の我身にて。清淨の心もさらになし。」今日の凡夫がたま〳〵聖人の御教化を聽聞して。後生を大事とし。手には數珠をもち。口には名號を稱へて。參り下向の足手をはこぶ其姿を側から見た時は。あつはれの後世者と殊勝らしふ見ゆれとも。夫れも多くは名聞。世間て假銀することは公義の御法度。もし假銀する者があれは。嚴ひ御仕置にあふことぢやに由て。流石に欲の深ひ凡夫でも。假銀はせねとも。御法義に付ては。我身の今度の一大事と知りなから。假銀をつかふことぢや。よひ年をして。是れはあるまひことなれとも。十人が十人なからみな名聞利養の假銀つかひ未來のはどが何とも心もとなひではなひか

○青蘚わらつとて葉を整へ兩端を縛りて中央に物を入れる

併し「名利に身を助けられて佛恩を報すへし」と御意なされたで。我等は大に力をゐた青蘚に金をつゝむ如く。名聞利養のわらつとの中へ。金剛心の金を御回向なされて下された。我等が身はさかさまにしてふるひたてゝも。根からまことはなひ。たゝあるものは欲と名聞。しかるに阿彌陀如來其名利にしづみ切りて。後世とも。菩提ともわきまへなき。愚痴無智の衆覺なしを救ひたひ助けたひと。乃往過去の昔しより。今日今時まで暫くもたへ間なく。哀み下さるゝ末とげた御慈悲にこの度めくみ立られて。若る身しらずの徒ものが。今は御助け候へと。大悲に縋り奉るやうには成た。この一念の信心は我持料ではなひ。直にそれが誓願の尊號。眞實功德相の南無阿彌陀佛の金を下されたしるしにてある。天親菩薩若るたふとひ御ことはりを。往生論一部に御勸化なされ。愚痴無智の輩を。ねんごろに導び

○光闡橫超大誓願の釋

き下されたを「依修多羅顯眞實」と御意なされた。さて次の文に「光闡橫超大誓願」とあるは。光闡とは「光廣也。闡開也。」すなはち本偈の文に

「觀佛本願力。遇無空過者。能令速滿足。功德大寶海。」この第十八願には遇てむなしく過るものなし。火にあへば燒け水にあへば濕ふ。彌陀を賴めは必す助かる。一人もゝるゝ者なく。一念の處に不可稱不可說不可思議の如來の功德を。こと〳〵く我身に滿足させて下さるゝ。譬喩へは川々の水が大海へおちこむは。清た水ばかりではなひ。濁水のにごりたきたなひ水も。海に入れは一味の潮となる如く。一念歸命の立ところは。川水の大海へ落ちこむた處。煩惱妄念。思邪無信の取るところもなひ穢ひにごり水が。如來大悲の潮と一つに成りて。身も南無阿彌陀佛。心も南無阿彌陀佛。我等が汚れた根性を。如來清淨の大悲心と轉し下さるゝは。橫超の大誓願。佛智不思議の御利益にてある。若る御ことはりをくれ〳〵御勸化あられたを。「光闡橫超大誓願」と御示しなされた。

○百川宗朝の喩

廣由本願力回向。爲度群生彰一心。

本願とは法藏因位の發願。惡人凡夫を賴ひばかりで淨土へ迎へとらふとの

○本願力の

釋

御約束。力とは果上の神力かの因位の御願の通りに。本願滿足なされて。何なる罪業おもきものでも。佛智の不思議として。極樂へ引接し給ふ御力の手つよひ處を本願力と云ふ。願同向とは往相還相。我等が心に疑ひはれて往生治定と淨土參りを安堵して。口に稱名を稱へよろこふは。即ち往相同向の信行。淨土へ參りおはりて惡趣に示現し。心のまゝに衆生を濟度するは。還相同向の抄用。ゆくもかへるも行者の私ならず。みな阿彌陀如來の本願力に由て。斯る御利益を。我等が身に得させ下さるゝ。天親菩薩頂てこの手本を御出しなされ。末の代の衆生極樂へ參りたくは。自力をすてゝ彌陀を賴め。先たちた父子兄弟か浮へたひならは。雜行すてゝ御慈悲にすかれ。これ此通りにせよと。他力往生の手並をあらはして御見せなされた

○願向の釋

○廣由の釋

願時に廣由とは廣狹反對の文字で。せまひに對してひろひと云ふ。凡夫自力の回向は本かせさせはひ料簡から思ひたつ回向ぢやに由て。人の爲にするも我身の爲にするも屆が狹し。其〳〵せ二階から目藥。膝頭て入唐するや

○入唐支

うで。茲たまどろしひに由て。天親菩薩そこを御存じしられて。廣由本願力回向となげかけて。他力の回向を御賴みなされた。願夫れに就て他宗にはすべて亡者の爲めに。追薦追福を修して。この功德を以て回向して。先だつものを助けるとをしむけることぢやが。是れも十方佛土隨願往生經の說によれは。如法にする回向でなけれは。亡者の爲めにならぬと見にた。如法とは怨親平等。あれは憎ひ。これは可愛と云ふやうな。差別のあるとでは。一つも亡者の爲めにならす。法界平等たれもかれも助かれと思ふ廣ひこゝろで回向するでなけれは。實の追福にはならぬ。夫れでさへ所修七分獲一と云ふて。修する功德を七つにわけて。纔か一分ならでは。亡者の爲めにはならぬとある。すればなか〳〵景負偏頗のかたよりた心から回向するは。決して亡者の追薦にはならぬ。然れは詮ずる處自力の回向は及はぬことに究りたが。今如來の本願を賴み。他力の回向に任せたれは。自身の往生は云ふに及はす。存亡の利益思議し難し。六親眷屬を首として。

○追薦追福の事

那に行くこと也

○和讃正像末和讃なり
○十向滿法界無量位の最後心なり
○爲衆云云大經の文なり
○爲度群生彰一心の釋

乃至法界平等。有緣無緣をうかひあがらすは。他力回向の御利益にてあるそこを御和讃に。「如來の回向に歸入して。願作佛心をうるひどは。自力の回向をすてはて〻。利益有情はきはもなし」と御意なされた。天親菩薩十向滿の位にのぼり給へは。回向は卽ち御家のもの。自力の功德で回向をしかね給はぬ御身分なれとも。極樂を願ひ給ふに。自力回向を運せられては阿彌陀如來因位の御苦勞が徒設になり。殊に自力の回向では。事が狹ふて思召すまゝに。御濟度の御手が屆ぬゆへ。「爲衆開寶藏。廣施功德寶」と。南無阿彌陀佛の寶の御藏を開かせられ。「普共諸衆生。往生安樂國」と。法界の衆生に。本願力の回向をつたへ給ひて。自行化他俱に彌陀の他力を賴ませられたを。「廣由本願力回向」と仰せられた。「爲度群生彰一心」とは。本と第十八の願に信心の德をあらはして。至心。信樂。欲生の三信と誓はせられた。然るを愚痴無智のものが聞て。三信とあれは信心を三つ貯ねはならぬことかと。六かしふ取りあやまりては氣の毒と

○寶章に曰く他力の三信といふは第十八の願に至心信樂欲生我國といへり、これすなはち三信とはいへともたゝ彌陀たのむ所の行者歸命の一心なり

思召して。論主合三爲一歟と。極樂參りの信心は。至心信樂欲生と說ては、あれとも。たゝ彌陀を賴むところの行者歸命の一心なりと。手みぢかふ御知らせなされて。愚痴の凡夫の惑を晴し。信心の根を固めて下さるゝ爲めに。論の初めに「世尊我一心」と御示しなされたが。やがて衆生濟度の爲めなりとて。「爲度群生彰一心」と仰意なされた。善導大師二河の御たとへにも。「汝一心正念直來。我能護汝」と仰せられた。是れは阿彌陀如來極樂淨土より。我等に御聲をかけられ。一心正念わき目をふらす。疑怯退心の憶病氣を出さず。我よび聲を賴みに。まつすぐに來れ。たしかに彌陀が護るはどにと。喚かけ下さるゝ本願招喚の勅命。その御聲を賴みに。昨日今日と御恩を喜び。一歩二歩すゝみゆけば。娑婆の迷は念々にとほざかり極樂のさとりは日々にちかよる。追付樂邦へ參りて。相好圓滿の阿彌陀如來へ。御禮を遂けませふものをと。老後のたのしみ此上はなひが。其領解のくるはぬが一心の姿ぢや。已に論偈の終に。「願見彌陀佛。普共諸衆

生。往二生安樂國一。」と仰せられて。天親菩薩の論を遊りて。一心歸命おそばさるゝも。的は極樂に往生して。阿彌陀如來へ拜謁がとげたひとの思召し。御坐の面々も夫れぢや。手に數珠かけるも寺參りするも。何からなれは。志す處は極樂へ參りて。生眞の如來へ御禮を申し上たひ。是れ一つの的ぢや。興ひかし晉に王子猷と云ふ人が有りて。無二の故人。戴安道と云ふものの瓦ひに湖水をへたてゝ向ひ合せに棲けるか。王子猷ある年の冬の夜終日ふりつもりた雪がはれて。時曾月夜のことなれば。四望皎然として遠近眞白に見わたる景色とうもいへぬ。去らは爰で一杯やらふと。かゝがんにして二三盃ひつかけたれは無上に面白ふなりた。いさ是から戴安道か處へしかけふと。家僮にいひつけ。浦につなひたる舟にのり段々漕ゆくところ。とうやらかうやら戴安道か屋鋪に近き。濱際までこさ上せ。さて舟から揚る一段になて。何とか思ひけん。舟を漕もどせ。もはや歸ふと云ふ。家來心得す。是れ迫て切角御いでなされ。戴安道先生の方へ御入りもなく

○王子猷か事

ひなしく返り給ふはどうしたことでさるぞと云ふたれは。王子猷が對にされは我れ今宵雪のはれた景色を見て。一杯飲だれは。めつたに面白ふなり興に乘じて。戴安道が處まて去てかふと思ひ付たに由て其方に舟をおさせ。是までは來たが。爰まて來たれは醉もさめる。面白氣もなふなり。急に歸りたふなりた。何そ必すしも安道を見ん。さしかかりて戴安道に逢ふて用事のあるではなし。强て逢には及はぬと云ふて。とう〳〵逢はす戻りたと云ふ事かある。今天親菩薩を首め御座の面々まて。一心歸命して彌陀弘願の御船を賴むは俄の思ひつき。苟且ことてはなひ。世々生々の宿善に催ふされたゆへぢや。かの王子猷は興に乘じての一盃機嫌。舟に乘りてゆく間のたのしみ。强て戴安道に逢には及ばなんた。然るに今は「願見二彌陀佛一。」ねがはくは阿彌陀佛を見たてまつらん。絹に畫たり。木に尅だ如來は娑婆でも拜むが。まのあたり御言をかけて下さるゝ生如來は。極樂へ參らねは拜むことがならぬほどに。是非とも此度淨土へ參り。生身の阿彌陀如

○御文四帖十五通なり

來へ。拜謁を遂けたてまつり。廣大御恩德の御禮を申し上たひと云ふが本意てはなひか。然るにもし雜行自力の計かまじりて。一心歸命の的をうしなひ。弘誓の船を乘りもどして。空しく三惡道の住家に歸らは。何と本意を失ふではあるまひ歟。故に蓮如上人大坂建立の御文に。「この一七个日報恩講の中に。信心決定あて。我ひと一同に往生極樂の本意をとげ給ふへきものなり」と御氣をつけられた。

○五門五果の事

歸入功德大寶海。必獲入大會衆數。

這の二句は論に果の五門と云ふことのある中の。初めの二門を顯はし給ふ果の五門とは。近門。大會衆門。宅門。屋門。園林遊戯地門の五つぢや。初めに近門と云ふは。御座の我等が目をふさぐと。直に極樂へ往生する姿をあらはされた。大會衆門とは。樂邦へ參ると。其まゝ大海塵沙の菩薩方の仲間入りすること。宅門と云ふは眞實信心の人は。邊地懈慢のかたはとりへは生れぬ。極樂淨土の都の中心に住ひさせて下さるゝと云ふこと。屋門と云ふは寂滅平等法身のさとりの奥座鋪へ通ると云ふこと。園林遊戯地門と云ふは。淨土へ參りて。我身の上の覺をきはめたれは。やがて還相回向の錦の袂をかゝやかして。普く一切の衆生を濟度すると云ふことぢや。

○歸入の釋

○大寶海の

さて此の果の五門の内。近門と大會衆門との二つを現益と云ふて。娑婆でねさせ下さるゝ御利益にして御示しなさるゝが。天親曇鸞の後身たる祖師聖人の御自由な御勸化で。殊さらありがたひこと。何と云ふに素この近門と申すは。極樂淨土へ始めて往生する姿ぢや。然るにそれを今「歸入功德大寶海」と仰せられたは。喩へは鏡にむかへは其まゝ影のうつる如く。一念南無阿彌陀佛と。如來の本願に向ひ奉る時。迷ひの姿は娑婆に在りながら。「心は淨土に棲あそぶ」と。精爽が直に淨土の場どりをするぞと云ふことぢや。それを今「歸入功德大寶海。必獲入大會衆數」と御意なされた。先つ歸入と云ふは如來の本願他力の御慈悲に。身も心もうちまかせて御助け候へと賴む姿。大寶海と云ふは。論で見れは極樂淨土のこと。恒沙

釋

○七寶　金銀、瑠璃、珊瑚、琥珀、硨磲、碼碯、

○八德　座身業、口業、意業、大衆、上首、主、不虛作の八功德なり

○必獲入大

無量の功德の寶を以て。御成就あそばされた寶國ぢやに由て。極樂のことを直に功德の寶海と云ふ。其七寶八德無盡の莊嚴。且は正報の尊容阿彌陀如來を首めたてまつり。恒沙無量の聖衆。この依報正報を約めて見れば。南無阿彌陀佛の六字の號におさまり給ふ。夫れゆへ今この偈文の御こゝろは。其依報正報を一つにつゝめて。名號の事を功德大寶海と仰せられた。去るほどにこの功德大寶海の六字の號の中には。盡虛空遍法界の功德善根一つものこさずこの中に攝へさせられたれは。是を喩ふるに海の如くぢやと云ふこと。本より名體不二の御證りなれは。名號が卽ち阿彌陀如來。然れは功德大寶海に歸入すると云ふを。手ちかふいへは各々我等が。雜行すてゝ助け給へと。一念に彼尊を賴みまするこどぢや。其賴む一念にはや我等がさとりの姿が。極樂淨土の鏡にうつる。其一念が往生の手初め。他力信心の行者は。爰に居ながら斯るたふとひ御利益をゝさせ下さるゝぞと。手みぢかな御勸化を遺し置て下された。次に「必獲入大會衆數」とは

會衆數の釋

この一句は第二の大會衆門にあたる。論の表ではこの大會衆門と云ふは。我ひと娑婆の命が盡きて。始めて極樂へ顏出しすると。久住の菩薩方。やうこそは參り給へるぞとて互ひの喜ひ。心も言も及はぬことぢや。やがて手を引て如來の御前へ御案內なさるゝ。さて尊容を拜み奉れはありかたや娑婆で拜みましたは繪像木像の御姿。今日おがみまするは百福莊嚴無量無數の相好を圓滿なされた生身の如來。我身をかへりみれは忝けなや。三界流涙の垢によごれた穢身とは違ふて。紫磨黃金の佛體。瓔珞細軟の衣服をかざり。光りかゝやく覺の姿。雲の如くあつまり給ふ菩薩方に仲間入りをして見たれは。「憶我娑婆同行人。」我身は覺を開ひたが。娑婆にのこる兄弟眷屬。有緣無緣の同行人迄。早ふ參りてこの樂みを得よかしと。待受ける はかりの仕合にてある。然れは正しく聖衆の仲間入りをするは。極樂へ參りてからのことなれとも。爰にありかたひは娑婆に居るうちから。何ん時でも宿善開發して。阿彌陀如來後生助け給へと。雜行すてゝ一念賴み奉る

○憶我云云　般舟讚の文なり

○古歌

其場で。はや往生の御約束をすませて下されたれは。「この世にてこの世のものと見えぬ哉。蓮のうへにおける白露」煩惱妄執の泥の中から。南無阿彌陀佛の蓮の花。たふとやありかたやと喜ひの露のをきそふありさまは。此世でこの世の物でなひ。「有漏の穢身はかはらねど。心は淨土にすみあそぶ。」爰を曇鸞大師は。「穢土假名人。淨土假名人。不レ得二決定一一。不レ得二決定異一」と御意なされて。五年十年。浮世逗留のうちは。士農工商の身すぎ世わたりは何とあるとも。指しつめこの身は極樂淨土の聖衆の御仲間ぢや。「眞實信心うるひとは。すなはち定聚のかずにいる」と。和讃にも御意なされた。論語に「斗筲人何足レ數」と云ふたは。ものゝかずに入らぬと云ふことぢや。何ても數に入ると云ふは大きなことで。堂上方は神代から傳りて。民間に落ち給はす。さてこの貴人と云ふは那御衆にきはせりた。夫れに付てある堂上方。上ぢれ垢づひた白服を著て居らるゝを。同し堂上の出合に。是れはいかふ小袖が賦れましたと調弄れたれは。夫公卿

○有漏云云 帖外和讃の文なり

○堂上人の事

二百二十四

早速の狂歌に。「ねづみ色の小袖をきても公家は公家。茶は宇治なれや花はみよし野。」いかさま地下人が何はと新らしひ結構な衣服を著ても。公家衆の仲間へは入られぬ。又種姓の人なれは。鼠いろの小袖。少々衣服が損じて有ても。神の裔の公家衆。さて武家の大名衆。萬石已上の人が。二百七十二諸侯とあれは。三百人にはつまらぬ。日本六十六國。數もかぎりもしれぬほどの夥しひ人の中で。わつか二百七十人と云ふ數に入るは。これ亦願ふても叶はぬことぢや。然るに今はありがたや。即今其身は屠沽の下類何はどいやしひ身のうへで有ふとも。一念歸命の信をうれは。其場で直に正定聚不退轉。極樂淨土の菩薩聖衆の數に入れて下さるゝ。皆ひをは千尋の海にたとへつゝ。露もたのまばかずに入りなん。然れはたとひ今生ては果報つたなくとも。信心決定の身は。この世から聖衆の數に入りて。やがて淨土に生れたらは。無上涅槃の上もなひ果報をいさせて下さるゝものをと思はゝ。この世のことの心にかなはぬに付ても。いとゝ御恩が思はれて

○屠沽 獸類を屠りて肉を販くもの

二百二十五

さてもありかたや南無阿彌陀佛〳〵。

得至蓮華藏世界。即證眞如法性身。

此の二句には。論の中にことはり給ふ。入の第三第四門の利益を次第の如く顯はされて。御勸化をなし下された。「まどひゆく浮世の中にもゆる火を故郷とのみ思ひぬる哉。」今の我等が住處は。娑婆三界の火宅。暫くも安堵のならぬ怖しひ處に住でゐるが。信決定の身のうれしさは。この世の住居も今しはし。追付目をふさぐと眞實報土。蓮華藏界を棲ひ處とさせて下さるゝ。夫をかの論に。入の第三宅門の利益と御示しなされた。「蓮華藏世界と云ふは。本と華嚴經に說けであるを。賢首の探玄記に。「如來願力所感大寶蓮華王爲依止」と釋せられて。阿彌陀如來因位の本願力に由りて。感得あそばされた極樂淨土の一名を蓮華藏世界と云ふ。「家をたつるには地形を固め。礎に念を入れて。其上て柱だてをする。兎角建ちものは地形礎が大事ぢや。去れは今極樂淨土の礎地形はいかにといへは。大寶蓮花王。

○古歌

○蓮華藏世界の釋

○家を建つる喩

阿彌陀如來の御慈悲。正覺の心蓮。南無阿彌陀佛が礎とならせられた。夫ゆへ極樂を蓮華藏世界と申す。藏はくらと云ふ字で。總じて人の家に立てをく藏と云ふものは。諸道具をおさめ置くところ。又入用次第に取りだす處ぢや。今極樂を藏に御たとへなされたは。法界に遍滿したる無盡の功德無邊の善根。過恒沙の萬德を。こと〳〵く極樂界中におさめ給ふと云ふ道理があり。又十方衆生惡人凡夫を。あまさず殘さずおさめとり給ふと云ふことはりがある。夫れゆへ極樂を蓮花藏世界と云ふ。是れはおさめかくす方から名が付けたものぢや。又楞伽經に。「十方諸刹土。衆生菩薩中。所有法報身化身及變化。皆從無量壽極樂界中出」と御說きなされたれは。一切諸佛釋迦も藥師も。みな極樂淨土より出現なされ。さま〳〵に善巧方便をめぐらされて。我等衆生に極樂參りの道をおしへ下さるゝ。そこを御文に「一切の神も佛とまふすも。今このうるところの信心一つをとらしめんための方便に。もろ〳〵の神もろ〳〵のはとけとあらはれ給ふいはれなれ

○御文三帖十通、二帖三通等の意なり

はなりとしるへし。」其諸神諸佛のあらはれ給ふはどこからなれは。皆な極樂から現れさせられた。ちやうどそれ〳〵入用の道具を。みな藏の中から取り出す如くぢやと云ふことで。極樂を蓮華藏世界と云ふ。「如來淨華の聖衆は。正覺の華より化生して。衆生の願樂こと〳〵。すみやかにと〳〵滿足す。」娑婆は闕減世界で。何ことも意に適はす。思ふやうにならぬが。萬端意にかなふて滿足するは。この蓮華藏世界。信決定の身は。この蓮華藏界の中心に生れ。阿彌陀如來の自眷屬となりて。永く三有生死の迷ひの根ざれのした處を。「得レ至二蓮華藏世界一」と仰せられた。次に「卽證二眞如法性身一」とは。是は入の第四屋門の利益を顯はされて。卽證とは卽は同時卽そこでそのまゝと云ふこゝろ。極樂に往生してから。菩薩聖衆の仲間入りをし。夫より蓮華藏世界へ家うつりをして。又程あて眞如法性の奥へ通ると云ふやうな。道ゆきに手間の入ることではなひ。極樂へ參るやいなや。五門の利益五つながら。立處に身にそなへさせて下さるゝ。手ばやな御利

○如來云云 高僧和讃の文なり

○卽證眞如法性身の釋

益を御示なされん爲めに。卽ちと仰せられた。さて眞如法性身と云ふは。論には。「寂滅平等身」とある。夫れゆへ文類正信偈には。「卽證二寂滅平等身一」と御意なされたが。直にそれが眞如法性身のことで。無上涅槃のさとりの名ぢや。眞如と云ふは。眞は眞實。如は如常。法性と云ふは。諸法の體性。いづれも阿彌陀如來の御さとりの名で。我等がこのたび極樂へ參ると。其まゝ阿彌陀如來のとはり。この眞如法性身をさとらせ下さるゝに出て。今までの「以諸惡業而自莊嚴」と。煩惱業の惡でかざりた依身は。今生かざりに脫すてゝじまふて。難有い寂滅平等の覺の姿となし下さるゝ。平生聽聞のとはり。彌陀同體のさとりを開くと云ふが爰のことぢや。何れもそこを喜はねはならぬ。曇鸞大師は「凡夫人天果報。若因若果。皆是顚倒。皆是虛僞」と御釋なされて。在座の面々。我も人も。有漏煩惱の雜業。顚倒虛僞のうそいつはりの業から生れ來たこの包身ぢやに由て。尊卑貴賤のへだてなく。百萬石の大名も。薦かぶりの非人も。異熟はみな四大

○以諸云云 觀經下中品の文なり

○凡夫云云 論註の文なり

○古歌

○古歌 鳥辺野とは都の東南にある墓場なり

和合のかりもの。『よしもなき地水火風をかりあつめ。我とおもふぞはかなかりけり。』尊も卑もこの世に生れきたれは。まう死ぬるこれは生れた報かな。是非に一度は死なねはならぬ。生きてゐるうちは。體もうこき手足もはたらけとも。一萬三千五百息の出入りの息は法界の風。身の軟氣は法界の火。肉しゝむらは法界の土。涙をこはし汗を流す。悪露不淨の露雫。みな法界の水の極微。この法界の四大をあつめて。かりの體となりてあるはちやうど借家すまひして居るやうなもの。住ふて居るうちは。我家のやうに思へとも。其家入用なとて。家主から追たてらるゝ時は。早速あけてわたさねはならぬ。今も地水火風四大假合の借家すまひの我等が身なれは。活て居るうちは我れぢや〳〵と思へとも。無常の家主に追立てらるゝと。只今でもあけわたしにせねはならぬ。『身はいつの煙りのたねとのこるらん人を送りてかへる鳥邊野。』今日はたれそれが葬禮ぢやとて。我も〳〵と供をして。野邊に送りて歸る道すがら。ふりかへりて後を見れは。たゝ一片の煙りとのぼる。我身はいつの煙りのたねぞと申し置れたは實に尤も。人を送りた我身のうへも。竟には人に送らるゝ。頼みすくなひは人間のありさま。道理こそ本が虚妄顛倒のうそいつはりの業で生れた人間なれは。亦一生もうそいつはりで果てしまはねはならぬ。然るにありがたひは『即證二眞如法性身一』極楽で得るさとりの身は。本の業からが違ふてあるぞ。『信心よろこふそのひとを。如來とひとしとゝきたまふ。大信心は佛性なり。佛性すなはち如來なり。』凡夫の虚偽の心をたねとするではなひ。阿彌陀如來の不思議の佛智。他力信心の佛性。大悲の御たましひが淨土參りの業と成て下されたれは忝けなや。何時でも彼國へ參ると。煩悩業の垢をはなれた。『即證眞如法性身』の。上もなひさとりの姿とはなし下さるゝ。

○信心云云 諸經讃の文なり

○遊煩惱林

遊二煩惱林一現二神通一。入二生死園一示二應化一。

この二句は論の果の五門の中。第五の出の功德。園林遊戯地門を顯はされて。即ち他力の還相回向の御利益を示し給ふ御文にてある。『遊二煩惱林一』と

の釋
○すなはち云云　和讃に曰く願土にいたれば速かに無上涅槃を證してぞ即ち大悲を起すなり之を廻向と名けたり
○遊の二義

は。是れは淨土に往生して。無上涅槃のさとりを開ひたれは。「すなはち大悲をおこすなり」と。身不動搖應化十方。さとりの身は。百寶華臺の上に在りながら。大悲の影は十方法界の衆生の心の水にうかむで。有緣無緣のものを自由自在。心のまゝに拯ひあげて。彌陀本願の御手にわたし。平等一味に淨土參りの本望を遂させ給ふが。極樂淨土の法身の大士。菩薩聖衆の遡相同向の御はたらきにてある。さて其菩薩方の。この娑婆に立ちかへりて。衆生を濟度なさるゝ姿を。今「遊二煩惱林一」と仰せられた。「遊ふと云ふに付て。曇鸞大師論主に二義を設られた。其中第二に自在の義と云ふがある。人を濟度することは。甚たなりにくひことなれとも。淨土の菩薩方の。衆生を濟度なさるゝは。獅子の鹿を搏るが如く。逸物の猫が鼠を搏より心やすひ。どのやうな惡人凡夫でも。自由自在に御助けなさるゝ。眞の遊嬉のやうなものぢやと云ふこゝろで。「遊二煩惱林一」と仰せられたがこの遊ふと云ふ字には。甚だ深ひ意味があて。遡相同向の聖衆等。ひかり

○四攝法　布施、愛語、利行、同事なり

かゝやく佛身を現し給ふと云ふでもなし。「示二現種々身一」と。いろ〳〵さま〳〵の形に成りて。迷の衆生のちりに交り給ふ。父ともなり母ともなり。妻ともなり夫ともなり。亦牛羊驢馬。牛ともなり馬ともなり。種々方便の姿形は。時により處により。對の機を鑑み給ひて。さま〳〵の姿をあらはして導き給ふことぢや。是れを菩薩の四攝法の中では。同事攝と云ふてたとへば泥の中へ投りたものを。拯ひあげふとするには。我身を汚すまひと身用心しては。思ふやうにはたらかれぬ。我身も其中へ飛ひこむて。俱に泥によごれねは。溺たものは救はれぬ。是を以て想ふに。祖師上人御一代の御化導がそれぢや。彼聖の本地は阿彌陀如來。垂迹を訪へは。御年九歲で御出家なされ。二十九歲までは天台眞言八家九宗の奧義を究めさせられたれとも。末代の凡夫は是れではゆかぬと。廿九歲の三月に。聖道門の數珠を切りて。法然上人の御弟子とならせられた。聖道淨土自力他力の異はあれとも。御年三十の時迄は。佛の禁戒を堅く守らせられ。淸淨の御出

○八家　三論、法相、俱舍、成實、律、華嚴、天台、眞言なり
○九宗　八

家の上に譬を加ふ

○三毒五欲食瞋痴は三毒、色聲香味觸は五欲なり或は財色食名眠の五と數ふるあり

家にて。愛著煩惱の泥によこれ給はぬ御身の上にてまし〳〵たれとも。近くは在座の面々。在家止住の凡夫。妻にまとはれ子にまとはれて。三毒五欲の深ひ泥の中に入て。浮ひあがることのならぬ我等がため。六角堂救世菩薩の御引導。法然上人の御指圖。月輪殿の御望みに由らせられ。御年三十一歳で。在家止住の恩愛の泥の中へ。なぐりなさけもなふ飛ひこませられ。御身は愛欲の泥によでれても在家止住の惡人凡夫を。一人ものこさず引つれて。極樂へ還らふならは。身は笑はれても大事なひ。謗られてもかまはぬと。我等が仲間入りをなされて下されたれはこそ。在家止住の凡夫の身で。御助け一定と安堵をすへ。一生造惡の死ぬるまで罪を造る凡夫の身なから。未來は花の臺の上と。淨土參りの曉を待ち受くるやうになりたはひとへに聖人御化導の御蔭。

○狂人の喩

「狂人走レ西。追者亦西。其走同。所二以走一者異」と。設は我子が發狂になりて走ぎはれは。其親がつれかへらふ爲めに。方々を追てまはる。側から見ては。二人ながら亂心のやうなれとも。一人は正氣で走る。大きに譯がちがふてある。今が夫ぢや。我等如き本有の佛性を取りうしなふた。散亂麁動の狂客ともをつれて還らふと。跡を慕ふて追ふてまはらせられたが。とう〳〵此度追ひつめられ。三惡道へ逃けゆくものを。否おはいはさず。是非とも極樂へつれて還らせらるゝが。祖師聖人御一代の御化導にてある。是から視れは。淨土の菩薩方。煩惱の林を遊ひ處とし給ふと云ふことが。よう聞へた。

○事をなすに欲心を用ゆると否との喩

譬喩へはものごとを欲からすれは汚れ。嬉戯にすれは汚れぬ。歌舞妓芝居などの役者は。度世にするに由て人が卑しめる。芝居ごとぢやと云ふて。身分の好ものが慰みに歌舞妓芝居の所作をしても。遊戯ぢやに由て汚にはならぬ。我等が一生の所作は。みな妄念に狂はされてのことぢやに由て。煩惱に汚されて。生死流轉の繫業となるが。還相回向の菩薩方。凡夫の塵にまとはらせられ。妻をもち子をもち。恩愛々著の汚れた伎倆をなされても。本が衆生濟度の御慈悲からなさるゝに由て。少しもさとりの汚に

○三細六麤業轉現を三細と云ひ智相、相續、執取、計名、起業、業繫苦を六麤と云

は成らぬ。去れは祖師聖人。在家同事の御身ぶりの姿は。凡夫の所作であれとも。御胸の中は蓮華葉の如く。はちす葉の泥を出て泥に汚れぬ。大慈大悲の御心から。我等凡夫の爲めはかりに。御身を汚して御見せなされた『淌易淌難』と云ふに。よ〳〵〳〵廣大の御慈悲なれはこそと。つら〳〵思ひめくらせは。其御恩德は身を粉にし骨をくだひても報しあきはなひ。さて『遊二煩惱林一現二神通一』とは。是れは論の來の第五門出の功德。還相回向の御利益をあらはされたる御文にてある。『遊二煩惱林一』とは。論には『入二煩惱稠林一』と仰せられた。稠は稠密と云ふて。繁茂て矢もくいらぬやうな林のこと。去れは我等が身にそなへた煩惱は。一念無明の迷ひそめから。三細六麤と次第に枝葉がさひて來たはどに。貪欲瞋恚等の煩惱に。おの〳〵二萬一千。三毒を一つに合せて等分の煩惱に二萬一千。合せて八萬四千の。かず〳〵の煩惱。まことをいへは無量無邊の煩惱安執。胸の内にみち〳〵たは。繁茂た林の如くぢやと云ふことで。『煩惱稠林』と仰せられた。時にかの還相回向の菩薩聖衆方は。其煩惱の林の中を。遊ひ處になさるゝと云ふことぢや。斯聞た時は。何れも行厨こしらへて。野山の曠ひ處へ出て遊ふことのやうにはつと思はれふが。左右ではなひ。本煩惱と云ふは心法のことで。表に顯はれたものでなし。我等か心のことぢやが。其心が可怖ものので。『嬉笑之忿甚於裂眥』と云ふて。陽つきにはとゝ〳〵笑を含て見せても。胸の中にはおそろしひ氷の刃をかくして居る。

○刀上蜜、酒中鴆

刀上蜜。酒中鴆。蜜は甜ものなれとも。刀のきつさきに塗てこれをまいれと突だしたを。卒とは嘗られまひ。是れは銘酒諸白ぢやと。美酒をふるまはれても。酒の中に毒を入れたれば。是れ亦むさとはのめぬ。凡夫の根性がみなこの通りて。言笑や容顏には仁ふ見せかけても。胸の中の煩惱の毒のおそろしさ。油斷のなるものではなひ。時に淨土の菩薩方の、還相回向の御化導と云ふは。其容貌の表てつきばかりに向ふて。御化導なさるゝではなひ。其刃をとぎ毒をかくした胸の内心の底。表に見ぬ心法。煩惱

○貪瞋云云散善義の文なり
○機關木人の喩

の林のうちにわけ入らせられて。悪人凡夫を御濟度なさるゝことぢや。御開山御一代の御化導も。在家止住の表ひきばかり仲間入りをなされて。この御宗旨を御弘めあられたではなひ。我等が胸のうち。『貪瞋邪僞奸詐百端』煩惱妄念の毒や劔の中へ分入らせられての御苦勞ぢや。『機關木人』と云ふは。木で造たからくり人形。々々は心のなひものなれとも。腹の内にからくりを仕かけて。面白ひ身ぶりをさせ。奇妙な藝をさせる。是れは腹の内の絲の操り。細工人の機關のしかけぢや。今もそれと同しことで。我等は世間の上では黙ふもあり。利口にもあり。あつはれ口をきひて。世事にぬかりはなけれとも。佛法の中へ出しては。信外の輕毛白地の凡夫。木でこしらへた人形同前。後生が大事ぢやとも。地獄がこはひとも。根からわきまへのなひ愚痴の我等が胸の中へ。還相回向の御手くばりをなされた。大悲の糸のあやつり。願力不思議の機關のしかけで。始めて後生を大事と思ふ心になり。雜行すてゝ如來を頼み。御助け一定の覺悟にもとづき。佛恩

○現神通の釋

報謝の御うやまひから。參詣恭敬の足手をはこび。如來聖人の御前にむかひ。手を合せて御禮を申し上くる身と成りたは。直にそれが還相回向の菩薩方の御はたらき。まのあたりは御開山聖人。我等が胸の中にわけ入らせられ。善巧方便の糸を引て下された御蔭にてあるそこを『遊ニ煩惱林ニ』と仰せられた。『現ニ神通ニ』とは。すべて佛菩薩の通力をあらはし給ふことは無用なことにはなされぬ。強剛難化うちても叩ひても合點せぬものを。とうど會得させたひと思召しては。たゞ〳〵に奇妙不思議のことを示し給ふことがある。まのあたり祖師聖人の。東關北陸御經回。廿九年の間。こゝかしこに奇特をのこされた。越後の國のさかさま竹。八つふさの梅。ある時は一の老婆を御すゝめなさるゝに。煎豆を地に植給ひたが。其煎豆から芽を出し花かさき實をむすんだところで。室を破て見れは。一々みな半分づゝ焦て。全く煎豆の形。今に至て相かはらす。廿四輩めぐりの人は。まのあたり是れを見ることぢや。是れはしばらく越後の國での事。其外關

○生死園の釋
○十二因緣
無明、行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死を十二因緣と云ひ惑業苦の三とし三世兩重或は二世一重の

八州に於て。種々の奇特種々の不思議をあらはし給ひて。愚痴無智の偏屈ものに。横手をうたせて。信心に本つかせて下された事ともは。かず〳〵多い事ぢや。若る方便利生の大悲の御手まはしで。今日の悪人凡夫。近〳〵は在座の面々迄が。あなたの御供を申して。此度淨土參りの本望をとゞくるやうには成りた。ひとへに還相回向の御かげにてある。次に入生死園示

應化とは。この御文は論にあらはされた果の第五門。出の功德を示し給ふ今の偈頌にてある。生死園と云ふは。即ち我等一切衆生。十二因緣の流轉にうつされて。三界廿五有の中をこゝに死しかしこに生れ。魂神一つをもとでとして。受くる形はいろ〳〵さま〳〵。「心虎狼者化爲虎狼」。心蛇蝎者化爲蛇蝎」人間はいつも人間に生るゝやうに思へども。悲しひ哉たましひの内に蛇もあれは蝎もあり。虎もあれは豺狼もあり。いろいろの業をたくはへて居るに由りて。物種の澤ひを得ては出る如く。悪の緣にさそはれては。ゆく末どのやうなわるひ形を受けて。いかなる苦みを

○十善
生、施食、放行、實語、直語、軟語、和合觀、不淨觀、慈悲觀、因緣觀

受ふもしれす。六道生死の其中にも。人間天上は果報且くすぐれてあれとも。陟ることは難く下ることは易し。山坂をあがるに。陟には大きに骨がおれる。下坂は心やすひ。人間天上はのぼり坂。五戒十善の脚腰が達者になければ。なか〳〵のぼらるゝことではなし。餓鬼畜生の三悪趣は生死の中の下坂。おちゆくことが至て心易ひ。それで御經に「入地獄者如雨」と御演說なされたが爰ぢや。久遠劫より今まで。この三界生死の巷に迷ふてゐる苦みの衆生をあはれませられて。極樂淨土の大悲の菩薩。還相回向の聖衆方。われも〳〵とこの迷ひの娑婆に立ちかへらせられて。御引立なされ下さるゝ。其御陰で他はしらず。今在座の面々。おそろしひ夢を見て居たものが。側からゆすりおこされて。どうやらかうやら。目の覺たやうに。祖師聖人の御流を汲むて。御勸化の一線路。雜行すてゝ如來を賴み。御助け一定あらうれしやの覺悟に本つきたは。還相回向の菩薩方の。阿彌陀如來の御手傳をなさるゝから。今本願の御慈悲を喜ふ。信心領解の身

○大經に曰く汝及十方諸天人民一切四衆、永劫已來、展轉五道、憂畏勤苦不可具言、乃至今世生死不絶、

○示應化の釋

とはなし下された。『生死園』と云ふは。園は比況。木竹花草うへならべてなぐさみ處にする場所を園と云ふ。我等凡夫はこの生死の園で。『憂畏勤苦不可具言。』いろ〳〵さま〴〵の苦みを受るか。淨土の菩薩方は。春のあした夏のゆふべ。園に遊んでたのしむやうに思召して御座なさるゝ。道理こそあれ生死岸頭に大自在を得給ふ御さとりの身なれば。火に入りてもあつからす。水に入りてもつめたからす。自由自在の御身のうへぢや。勿論隨類應同い御化益なれは。表は凡夫の塵にまじはり給ひても。蓮華の泥の中にそだちて。しかも泥によごれず。花の中での君子ぢやと稱る如く。水鳥の水に入れども羽もぬれす。海の魚とてしほもしまばや。煩惱生死の苦みの世界に。立ちまじはりてましませども。いさゝか御身に汚を受け給はす。意のまゝに衆生を濟度なさるゝぞと云ふことで。『入生死園』と御勸化なされた。『さて『示應化』とあるは。論に『示應化身』と仰せられた。示すと云ふは左右して見せると云ふほどのこと。極樂では『即證眞如法性身。』寂滅平等のたふとひ御さとりの身なれども。娑婆に出現なされては。時により處により。又對の衆生に由りて。濟度の御姿はいろ〳〵さま〴〵に成て御見せなさるゝと云ふこと。『已に觀音は三十三身を現じ給ひて。國王。大臣。長者。居士。宰官。婆羅門。婦女身等とあれは。國王ともなり。大臣ともなり。百姓ともなり。商賈ともなり。男子は勿論。五障三從の女の形ともあらはれさせられ。夫れのみならず。馬頭觀音と現じては。畜生道をすくひ。十一面觀音とあらはれては。修羅道の苦みを助け給ふ。觀世音菩薩には限らぬ。『觀音勢至もろともに。慈光世界を照耀し。有緣を度してしはらくも。休息あることなかりけり』と御意なされた。此のもろとゝあるを。一往では觀音勢至の二菩薩。御心を合されて。衆生濟度し給ふことゝばかり聞ゆれとも。再往窺ふて見れは。ありがたひ謂がある。在座の面々今にも淨土へ往生すれば。觀音勢至ともろともに。衆生濟度の還相廻向。心のまゝになさしめ下さるゝと云ふことにてある。時にて

○觀音菩薩の種々に身を現する事

○五障　梵天、帝釋、魔王、轉輪聖王、佛身となる事を得す

○三障　在家從父、適人從夫、夫死從子、

○觀音云云　淨土和讃の文なり

の應化の應の字は。物に相應する義で。向の氣にあふやうにすることぢや

○韶呂愛居を饗する事

賓客を招でもてなすを饗應と云ふ。「亭主の好に朱烏帽子」と。いかに亭主が好物ぢやはどにとて。客の口にも合ぬものをふるまふては。客はよばれても却りて迷惑。客をよぶかふは。料理獻立何から何まで。亭主の馳走が向の氣に合ふやうになければ。饗應とはいはれぬ。賓「韶呂饗二愛居一」と云ふことが有りて。昔しもろこしの魯の君か。領分の内から愛居と云ふ珍しひ禽を獻上したれば。「あはう鳥ずき」と君がおろかな人で。殊の外其鳥をよろこび。何がな馳走にとて。笛。大鼓。笙。華藻の樂を奏して。馳走せられたれは。鳥は大きに驚き。餌ばみもせず。あけくに死んでしまふたと云ふ事がある。是れは對に不相應な馳走ぢや。鳥はおろか。人でも夫ぢや。山家の野臾をよんで。茶室へ通し。茶をたてゝふるまふたらは。さぞ迷惑がるで有ふ。時宜作法もしらぬ山家そだちの者を客にする日は。亭主もそれ相應の行作で。うちくつろひでもてなさねは。向の心にはかなはぬ

○口傳鈔に曰く親鸞は弟子一人ももたす何事を教へて弟子と云ふべきぞや皆如來の御弟子なれば皆共に同行なり

佛菩薩の衆生を濟度なさるゝも亦其の如く。間近ふ云ふて聞さふならは。極樂世界の本地をおがめは。報身報土の御あるゝ。十方三世の諸佛如來の本師法王と敬はれ給ふ阿彌陀如來。それが六百年のむかし。此の日本にあらわれさせられては。御開山聖人と御姿をやつされ。佛弟子の體義作法をつくし給ひ。在家一同の御身ふりとならせられて。この御宗旨を御取り立てなされた。誰的の御馳走と思ふぞ。日本國中の總御門徒。まのあたり御座の面々を。極樂參りの大切の御客ぢやと思召さるゝから。人のうはさも世の義理も。我等か爲めに御すてなされて。在家止住の凡夫仲間へ立ちまじはらせられ。御同朋御同行と。我等が手を引て。淨土へつれて還らせらるゝ。滿九十歳の夕まで。徒や跛の御苦勞は。全く在家止住の惡人女人。御座の我等を御馳走の御もてなしにてある。

本師曇鸞梁天子。常向鸞處菩薩禮。
三藏流支授淨教。焚燒仙經歸樂邦。

○四論宗中觀論、百論、十二門論、大智度論に據て宗を立す

如來御入滅後一千四百年に當りて。曇鸞大師もろこしの雁門と云ふ處に御出世なされた。この雁門と云ふは。北に當りて甚だの邊鄙ぢや。それゆへ彼方は畢下なされて。つねに廚僧曇鸞と仰せられて。みづから北狄ぢやと名のらせられた。然れとも「君子居何陋之有。」處は北狄でも。御德が香しふすぐれ給ひたに由りて。梁の代の帝。簫王と申したが。深く御歸依をなされ。つねに曇鸞大師の御座る方に向はせられ。玉の冠をかたむけ給ひ。曇鸞菩薩々々々と唱へて。掌を合せて禮拜なされたとある。そこを今の偈頌に。「本師曇鸞梁天子。常向二鸞所一菩薩禮」とあらはされた。「三藏流支授二淨教一。焚二燒仙經一歸三樂邦一」とは。これは曇鸞大師十二三の御年に。五臺山にのぼり給ひ。不思議の靈相をおがませられて。御幼年なから佛法のたふとひことを信じて御出家なされ。初めは四論宗と云ふ宗旨を御學ひなされた。この間に大集經の註釋をなされて晝夜をわかたず根機をつくし給ひたが。あげくに氣の方の御病氣を受けさせられ。ぶら〳〵と煩ふて御坐なされた處。ある時不思議の奇瑞を感じ給ひ。夢のさめたやうに御病氣御本復なされた。其後つら〳〵思召すやう。實に人命不定の世のありさま。若ひと云ふて負にはならぬ。我たま〳〵佛道修行と志しても。札夭じてしまへは。切角つとめたことも退墮がする。何とぞ壽命を長ふ持ちて。ゆる〳〵と修行したひものぢやと思召すにつひて。つら〳〵思ひ給ふに。凡そこの土に於て。長命をたもつこと。仙人にすぎたるものなし。さらは是れより仙術を學ひ。其うへ佛道を修行せんと思召すところ。おりふし其みぎり江南の陶隱居と云ふもの。仙人の術をにたりと聞き及ばせられわざ〳〵かの陶隱居がもとへ御出なされて。仙術を書いた書物十卷を授り給ひて。御かへりなさるゝ道すがら。魏の都をとはり給ひたれは。遙か向より脊の高き殊勝な老僧があゆみ來らるゝ。曇鸞ゆき合ひ給ひ。凡人ならず思召して。そも御老僧は何國の御方にて候ぞと御尋ねあれは。御老僧の答に。我は天竺の菩提流支なり。又御身はいかなる御方ぞと尋ね給ふ。我

○曇鸞大師菩提流支に面し給ふこと

○三衣僧伽梨、鬱多羅僧、安陀會の三衣なり

は鴈門の曇鸞にて候と仰せられ。御ふたりが舊から相識のやうに。互ひに物がたりなされたが。良あて菩提流支三藏の給ふは。座下のつゝむて持ち給ふはいかなる聖教にてかあるぞと仰せあれは。曇鸞大師。陶隱居が處へ御出なされた思召し。委細の謂を物がたりなされて。佛道修行のため。長命かたもちたさに仙經を授りました只今其歸りかけと御物語あれは。菩提流支三藏。にが〳〵しひ顏色をなされ。夏むき路傍に犬猫の死んて臭ふなりてあるを。見るほどの人がきたなかるやうに。大地に唾ばきをなされ。さても〳〵見さげはてたる心底かな。佛弟子となりて。三衣も著するものが。外道の教を學ふものか。けからはしやとにがり切て仰せられたに由てさしもの曇鸞大師も驚かせられ。然らは佛法の中にも。この土の仙經にすぎて。長命をたもつ教がござるかと仰せられたれは。あるともある段ではなひ。設ひ仙人の術をきはめ。千萬年の齡をたもちてからが。命に限があて。終には死んて地獄へ墮ねはならぬ。其に長き壽命を持ちて。死ぬる怖れのなひ教と云ふは。幸これてゝにと。懷中から一卷の御經を取り出して授け給ふ。曇鸞大師をしいたいひて。外題を見給へは。佛說觀無量壽經とある。曇鸞大師これを一目御覽なさるゝと。夜のあけた如く。夢のさめたやうに。さては無量壽の阿彌陀如來を賴めは。頼む衆生も同しく無量壽のつきせぬ命。涅槃常住のすぐれた果報を與へ下さるゝことのたふとやと。忽ち一念の信心を御決定あて。何かをいはず。薪をよせ。道のまん中で仙經十卷おしげなく。さつはり燒きて御すてなされた。猶また是れまでは四論宗でおはしましたが。その宗旨も改め給ひ。本願他力の門に入らせられ。七高僧第三番目の知識とはたゝせられた。爾さて此仙經を燒きすて給ひたに付いて。不審を立てゝ見やうなれは。曇鸞大師。菩提流支三藏の教に由て。仙術の方は御すてなされ。深く淨土門へ立ち入らせられたれは。あながちに其書物を燒いて御すてなされずとも。御心さへすて給ひたらは。夫れですみさふなものぢやか何と云ふに。この燒いて御すてなされたが。御

○仙經を燒き失てたる事

胸の内にさつはり雑行氣のすたりた効ぢや。これを以て在座の面々。聖人の御流れを汲むほどの人は。やう理會したがよひ。動ては承當すぎて。兎角胸の内が大事ぢや。一心さへ決定したれは。設ひ家の内に御禮は糊ても神棚かざりても。夫に拘ることではなひなどゝ。利口にいひくろめる者もあれとも。夫れはまことに雑行を捨てたでなひ。宿て祖師聖人の御勸化。もろ〳〵の雑行をすてゝ。餘所見をすな。わきひら見るなと。くれ〳〵御すゝめなさるゝを。諦に聽聞して。專修一向の御安心を。これぞ大事と守る心底ならば。雑行雑修に類倍たこともいたさふ道理はなひ。併し斯いへばとて。王法機嫌のわけも知らす。祖師上人の御一流に。疵のつくところへ氣もつかす。我こそ雑行をすてたれと。人の譏。世の嘲もかへりみぬは夫れは大きなあやまり。大凡神棚をつらす。禱符を糊す。守りをかけぬと云ふは。是れは天下はれて御宗旨の御作法。何もさしつかへにはならぬ。夫に左樣の事を止めかねて。私の心の中は迷はねとも。是も一つは王法でさると。王法にことよせて。胸の中の不領解なが多ひ。凡夫仲間では夫れで誣されふけれとも。如來聖人の徹鑒にかけた時。ちつとでもくもりが有りてはこの度の極樂參りは叶はぬ。

天親菩薩論註解。報土因果顯誓願。

この偈文一行二句は。曇鸞大師御一代の御化導。他力眞宗の御安心御勸化の趣きをあらはされた。「天親菩薩論」とは。即ち淨土往生論一卷。この論は總じては三部經。別しては大無量壽經一部の意をあらはされて。彌陀の本願他力の御利益を說きて。御きかせなされた。「佛爲二迷レ道者一說レ經。菩薩爲二迷レ經者一造レ論」とありて。さとりの方角に迷ふた衆生をあはれませられて。釋迦牟尼如來御一代八萬四千の法を說きて。さとりの道路をおしへ下されたれとも。御經のいりわけが六つかしふて。會得しかねるものゝ爲めに菩薩のあらはれ給ひ。御經のこゝろを解はどきして。佛の敎に迷はぬやうになされて下さるゝことぢや。然れとも其論でからが。義理が六か

○天親菩薩論の釋

しふて。なか〳〵卒はうかゝひ得られぬ。是れに由りて人師達思ひ〳〵に註をつくり。御經や論のたふとひ義理を知らせて下さるゝことぢや。今天親菩薩の往生論も。大經。觀經。阿彌陀經。三部四卷のこゝろを取りつゝめて。他力の道に迷はぬやうに。遺し置ては下されたれとも。其論でからが。其義幽深と云ふて。義理が奥ぶかふて。容易く合點がゆかぬ。そこで曇鸞大師。後の代の我等が爲めに。往生論一部のこゝろを。ねんごろに解はときをなされた處か論註二卷。それを今の偈頌に。「天親菩薩論註解」と御意なされた。興注解の注の字は。三水に願へた文字で。そゝぐと訓す。大きな池に水を一杯たゝへ置くは。其下の田地をやしなはふ爲めぢや。田地をやしなふには。堤をかため樋を入れ水脉をつけねは。其水が田地の畿ひにならぬ。去るはどに早魃の時は。別して百姓が骨を折りて。其水をわきべにがさず。少しでも田地へ灌くやうにする。其やしなひに由りて。苗もそだち米もとれる。天親菩薩往生論は。たとへは池の如く。この論一部

○註解の釋註字を注字の意にて釋するは恐くは誤解乎

の御おしへは。池に湛へた水の如く。其御をしへの水とは。「世尊我一心。歸命盡十方無碍光如來。願生安樂國。」天親菩薩の阿彌陀如來を御頼みなさるゝ。一心歸命の信心の水。論主は歴々の菩薩のことなれは。我一心と仰せられたも。つひ並々の一心ではあるまひ。さぞ奥ぶかひ御心て有ふと思ふて居たに。左右ではなふて案の外な。曇鸞大師かの往生論の池にかゝらせられ。論註と云ふ樋を入れ。溝渠をつけて下された處が。「論主の一心とゝけるをは。曇鸞大師のみこゝろには。煩悩成就のわれらが。他力の信とのへたまふ。」天親菩薩の論にたゝへさせられた一心の水は。自力聖道の余所の田地をうるほす爲ではなひ。「言念無碍光如來無他想間雜」と曇鸞大師。我等が胸の内。心の田地へ致力の道すぢをつけて。注ぎ流して下された。其思召しはどうなれは。天親菩薩の一心と仰せられたは。六かしひ一心の事ではなひ。論主もゝろ〳〵の雜行をすてゝ。余所見をせす側目をふらず。阿彌陀如來後生御助けと。一念に如來を頼ひて極樂參りを安堵な

○論主云云曇鸞讃の文なり

○言念云云論註上卷の文なり如來の下「願生安樂一心々相續」の句あり

○報土因果願誓願の釋

○八功德池經、清、冷、軟、美、香、

された。後の代の在家止住の悪人凡夫も。雜行すて〻如來を頼め。たのむ一念に御助けは一定ぞと。如來大悲の水の流れを。我等が胸にそゝぎ給へは。生死永劫煩惱悪業の永旱にあふた枯渇の凡惑も。今は御助け一定。御恩ありかたや南無阿彌陀佛と。信心相續の苗が長ち。追付淨土に往生して無上涅槃と云ふ覺の米をおさむる末一段になし下されたは。ひとへに曇鸞大師の御蔭にてある。「報土因果願誓願」とは。報土は蓮華藏世界。眞實の極樂淨土のこと。因果と云ふは因はたね。果は果報。即ち論註に「佛本何故起此願」と。彌陀本願の興起をたづねて。さればこそ迷ひの衆生が。なが〻生死流轉の苦みに沈むをあはれませられ。此大願を發し。極樂世界を御成就ありしぞと。ねんごろに御釋を設けられた。然れは極樂世界の根本の因と云ふも彌陀の本願が因となられた。已に淨土を御成就ありて。七寶八德。無盡の莊嚴。寶の樹のすゑ葉。八功德池の水一滴まても。みな願力不思議から願はれ給ひたれは。參る衆生も自力の心行では

思無飽、飲無厭

叶はねはどに。本願成就の報土へは。彼尊の本願力を頼て參れと。我等を導ひて。如來の御慈悲に本とつけ下さるゝ御勸化を。「報土因果願誓願」と御意なされた。

往還回向由他力。正定之因唯信心。

○往相還向の釋

祖師聖人御一代。又しても〻。往相還相の回向と云ふことを仰せられたが。本は曇鸞大師の御釋がよりどころ。其源は天親菩薩の往生論に。五念門をあらはし給ふ第五に。回向門と云ふを擧させられた。この回向を御釋なされて。「回向有二種相。一者往相。二者還相」と。二の回向を顯はされた。其往相回向とは。往相は往生の相狀と云ふことで。手近ふいへは。我等が極樂參りのなりふり。其極樂へ參るなり姿はどのやうな相で參るぞ。いかなる狀で往生するぞと云ふに。約る處他力の心行を得たが。淨土參りのなり姿。其心行とは彼尊を頼む一念の時。往生治定とおちつひたれは。をのづから參り下向の手足をはこぶやうになり。口には御報謝の稱名をあ

け暮稱へ喜ぶ。夫れが直に極樂參りのなりふり。往生する姿と云ふものぢや。この身になして下されたは。偏に如來の他力回向の御かけぞと心得るが。即ち往相回向の姿を心得たと云ふもの。最初一念如來を賴みそめて夫れから淨土に往生して。無上涅槃のさとりを開くまでの業事は。みな如來の御回向往相の德。[illegible]さて還相回向と云ふは。「還二來穢國一度二人天一」の姿と云ふことで。そこを御和讚に。「安樂淨土にいたるひと。五濁惡世にかへりては。釋迦牟尼佛のごとくにて。利益有情はきはもなし。」「富貴而不レ歸二故鄕一。如二衣レ錦而夜行。」故鄕へは錦をかされと云ふ。山家小在處に生れたものが。幼少の時親の手をはなれ。都會の地へ奉公に出たところ。後に大きに立身して。在處へ歸り。貧乏な一門一家までを淨びあからしてやりたらは。誠に先祖へのつとめ。親への孝行あつはれなことで有ふ。「我たにも先つ極樂に生れなは。しるもしらぬもみな迎てん。」娑婆三界の山家育の我等が。御開山の御手引で。極樂の都に往生して。一生補處の位をき

○還相回向の釋

○古歌

はめ。神力自在の身と成りて。娑婆三界の在處へ歸り。世々生々の父母兄弟までを救ひあげてやるやうになして下されたは。何と快ひことではあるまひか。我も他も追付淨土へ參れは。みな其妙用をなさせ下さるゝ。それを還相回向と云ふ。「由二他力一」とは論註に「願求二其本一。阿彌陀如來爲二增上緣一」と。信も他力。行も他力。因も他力。果も他力。往も反もみな阿彌陀如來の本願不思議の御利益にてまします。[illegible]ひかし佛弟子の目連尊者。釋尊御說法の御音が。御側で聞ても。隔てゝ聞ても。どちらも同しやうに聞へ給ふ。それから試に通力を現じて。大鐵圍山の頂までも御出なされても。側で聞くと同しこと。夫れからはる〳〵須彌山の絕頂まで御出なされても。側で聞くと相かはらぬ。去らは大のしをして見やうと。東方萬八千の國土を過きて。光明幡世界と云ふ淨土まで御出なされ。虛空に在て聞き給ふ處に。釋尊の御聲御側で聞かるゝに少しもかはらす。あり〳〵と聞えたが。おりふしそこで目連の神力がつきて。虛空からすつとんと墜

○由他力の釋

○目連尊者佛音聲を聞くこと

ち給ひた處が。其淨土の御齊の最中。さて教主光明幡王如來。御身の長が一里。諸大弟子もそれに准じて。いづれも御脊が高かりたが。御弟子の持てござる鉢の緣へ。目蓮の落ち給ひたれば。其御弟子が目蓮を指のさきにのせて。奇妙な。袈裟をかけて佛弟子の形に似た蟲か落たはと云ふて。總々見てござつたれは。爾時光明幡王如來。大衆に告けて仰せらるゝは。汝等必す蟲ぢやと思ふて輕蔑な。是れは娑婆世界。閻浮提の教主。釋迦牟尼如來の御弟子。目蓮尊者にてある。如來の音聲いづく迄とゞくぞと云ふことを試みる爲めに。これまて來りたが。しかし是れ全く目蓮の通力に非らす。釋尊の通力を加へ給ふなりとて。又目蓮尊者に告け給ふは。汝如來の音聲を試みんとすれとも。設ひ十方世界どこまて往くともかはることなし汝疑ひはらしてこれより閻浮にかへるへしと御意なされたれとも。目蓮通力が盡たれはいかゝはせんと按じわづらひ給ふ其とき。光明幡王如來目蓮尊者を御手の掌にのせられ。息をふつと吹かけ給へは。目蓮尊者また故の

如く通力を以給ひ。虛空を飛んでしばらくの間に。閻浮提釋迦牟尼如來の高座のもとへ還らせられたとある。是れでたとへて聽聞あらふ。目蓮光明幡世界まで。我通力で參りたと思はれれとも。實は釋迦牟尼如來の通力を御かしなされたのなり。亦閻浮提へ還へられたは。光明幡王如來の神力を御かしなされたである。此度我等が彌陀を賴むて淨土へ參るは。全く如來の他力なれとも。念ずるのは自己の力ぢやなどゝ思ふたら。大きな科簡ちがひ。「凡是生二彼淨土一。及菩薩人天所起諸行。皆緣二阿彌陀如來本願力一」と御示しなされたれは。御座の我等が。このたび淨土へ參りたひ心になり如來を賴む一念の信のおこるも。全く如來の願力不思議。あすが日でも淨土へ參ると。衆生濟度の爲めに送ひの娑婆に立ちかへりて。思ひのまゝに衆生を濟度する身になして下さるゝ。是れ亦彌陀の願力不思議。かの目蓮尊者はゆきがけは釋尊の神力。御かへりには光明幡如來の通力を加し給ひた。此度我等が往相還相は。ゆくもかへるも阿彌陀如來の願力不思議の

○凡是云云論註の文なり

○正定之因唯信心の釋

御息をかけて下されたほどに。そこを『往還同向由二他力一』と御意なされた。『正定之因唯信心』とは。正定は即ち阿鞞跋致なり。一念の處に往生の御約束すむでの後。あともどりせぬが正定聚不退轉の位。自力難行の上では。三大阿僧祇の永の修行のうち。二大阿僧祇の功をつまねば不退の位には至られぬ。然るに今は一念の信心ばかりて。不退轉正定聚の位にかなはせ下さるゝ。『先德の「譬如二陸叙一」と示されて。陸叙とは位牌知行のこと。先祖の勳功で。國とり大名に成りていれば。其子孫はたとひ不器量でも。代々ゆづりの位牌知行で。人にかしづきうやまはるゝ如く。我等がやうな無調法ものも。阿彌陀如來五劫永劫の御苦勞の大庇で。他力同向の知行をとり。この度は極樂往生の上もなひ身の仕合をきはめさせて下さるゝ。

○陸叙の喩

感染凡夫信心發。證二知生死即涅槃一。
必至二無量光明土一。諸有衆生皆普化。

○惑染凡夫の釋

這の御文は專ら曇鸞大師の往生論注の意を顯はされて。他力同向の不可思議なる御利益を示し給ふ。「惑染凡夫」とは。惑は煩惱の異名。染は染汚とつゝひてけがすと云ふこと。白い帛などをきたなひ泥でそめ汚す如く。一切衆生心性の精爽は。本來清淨なものなれとも。「一すちに思ひそめにしその色のまた白絲にかへるへきかは」。多生曠劫この世まで。煩惱のけがれを以て。心の帛をぞくてん染めよこした我等が身のうへ。それを惑染の凡夫と云ふ。愛にありかたひは。「高原陸地不レ生二蓮華一。卑濕淤泥乃生二此花一。」凡そ水陸草木の中に。蓮華はどきよらかなものはなひ。夫れて古人も蓮華の君子ぢやと云ふた。然るに其きよらかな蓮華が。陸地の奇麗な處には生ず。しかもきたなひ泥の中でなければそだゝぬ如く。他力同向の信心の蓮華は。智者上人の淸淨な心の內を本とし給はす。この惑染の凡夫。貪愼煩惱の泥の中から。しかも往生一定といさぎよく。歡喜踊躍のよろこびを得させ下さるゝ。この領解になりにたれは。「證知生死即涅槃。」この身は娑婆

○高原云云論註下卷に出ず

○證知生死

即涅槃の釋

○江春入舊年

にありながら。魂は已に淨土の場どりをさせて下された。〽唐人の詩に。「江春入舊年」と作たは。もろこしの江南はすぐれて土地の暖かひ處ぢやに由りて。冬のうちに既梅の花がさく。梅は春の氣にならねは咲ぬものなれとも。處が暖氣なれば。冬の内から春の氣をむかへて梅の花がさく。梅を見て春の來たことをしると云ふこゝろぢや。「咲きぬへき時こそいたれ梅の花。雪も氷りもとけずそのまゝ」と。祖師上人の詠じ給ふ如く。雪も降り氷もはりつめてある余寒のおりからも。咲くへき春の時節がくれは。梅の花は咲いた。梅を證據に春の來たことをしる如く。煩惱の氷もあつく。罪業の雪もふりつもりてあるその中に。一念如來を賴む信心の花の開ひたは。生死の迷に身はありながら。いつしか極樂のさとりの春を迎へたるしるしぢやはどに。この信心を證據として。爰に居ながらはや往生の定たことをしるを。證知生死即涅槃と仰せられた。〽「必至無量光明土。諸有衆生皆普化。」この二句に正しく往相還相の德用を御示しなされた。「必」とは

○必至無量光明土諸有衆生皆普化

の釋

○一念云云淨土論の文なり

○德雲比丘の事

「金剛心成就顔」と御意なされて。一念の信決定すれは。是非々々極樂へ參ると云ふこゝろ。「無量光明土」とは。平等覺經に出て。すなはち極樂淨土のこと。今は眞實報土のすくれたことを御しらせなされん爲めに。無量光明土と仰せられた。「諸有衆生」とは。成就の文に見にて。即ち十方衆生のこと。「皆普化」とは。善人惡人。聖人凡夫。出家在家。智者愚者。男子女人。對機さらはす。如來の本願に誘めいれ給ふ姿を皆と云ふ。普〳〵と云ふは。「一念及一時。普照諸佛會。利益諸群生。」還相同向の聖衆方。どこ迄も。御手くばりをなされ。御濟度なさるゝはどに。御手のとゝかぬ處はなひと云ふこと。化は轉なりと云ふて。物がらの變ること。强剛難化のかたいぢものを勸めて。惡を轉じて善とかへ。疑をはなれさせて信心に本づけ。生死の迷ひをひるがへして。この度涅槃常樂のさとりをにさせ下さるゝ。〽昔しもろこしに。ある人。一の子を出家させ。おりふし山中に德の高ひ老僧の居られたゆへ。それを賴ひて弟子につかはして置た。三年の後

小僧親の家へ歸りた。親が尋ねて。師匠は何を教へられたぞ。經をよむだか。否。經はよみませぬ。手習はしたか。否。手習はいたさぬ。讀書はしたか。否よみものはいたさぬと云ふ。そこで親があきれて。是れはけしからぬ。三年立て何一つ習はぬと云ふは。頭すりたばかり。本の能なし猿。左やうな師匠につけては置れぬと云ふて。夫れから方々聞合せて。又ある寺の住持に當世の知識といはるゝ大德の出家が有たに由りて。其寺へ小僧をつれて參り。住持に逢ふて。件のわけを物がたりし。何とぞこのものを御弟子になされて。出家になるやうに御おしへなされて下されよと賴むたれは。住持つく〳〵と小僧の體を見て。そして其老僧は名は何と申したたと尋ねらるる。小僧が應に。何と申したか存じませぬが。ある時旅僧か一人來て。菴室にむかひ德雲比丘は御やどに御座るかと聲をかけられましたは是れから親れは。德雲と申したさふにござると返答したれは。住持よこ手を打ちて。左こそ有ふけれ。それは昔し善財童子。五十三人の智識を求め給ふ其中の一人。華嚴經に說けたる功德雲比丘にてこそあれ。是れ凡人ならず。即ち文殊菩薩のことなり。さて〳〵たふとひ知識にめぐりあふたことかな。我先尅からての小僧の爲體をうかゝひ見るに。何とも聖者にもせれて。自然とその德に化したものと見にて。どこともなふたゝの人間とは思はれぬ。今少時その老僧のもとに附をかば。程なくさとりの聖者になるで有ふ。急ひで故の如く。山中の老僧へあづけたら好からふ。此の小僧まふ常人でなひに由りて。なか〳〵拙僧が力には及はぬ。もそつとで聖者になるほどにと申さるゝに由て大きに驚き。それから直に小僧をつれて。かの奥の莽室を尋ねて去たれは。唯見るものは松や杉ばかり。莽室もなけれは老僧も見になんだほどに。大きに後悔したと云ふことが。佛祖統紀に見にた。凡夫の目には何にもしらぬ小僧ぢやと思ふて居たれとも。又識ひとは知りて。聖者の德にもまれて。どこともなふつねの人間とは容子の異たことを見つけられた。其容子のかはりたところが聖者の德に化せられ

たと云ふものぢや。今還相回向の聖衆にあひ奉りて。御化導にあつかるも亦其の如く。指あたりては面々は御開山の御流を汲むて。あけ暮あなたの御勧化にもまれたれは。心だてばかりが變るではなひ。姿形までも容子がゝはりてくるはづぢや。そこは凡夫の目には見えぬ。然れともしる人はしる。御文に『眞實信心を獲得したる人は。必ず口にもいたし。又色にもその姿はみゆるなり』と御勧化なされた。我も他もこの還相回向の菩薩聖衆方の御化導にあづかり。まのあたり聖人善知識の御すゝめに由て。程なく迷の形をのがれて。やがて紫摩黄金の佛體。たふとひ覺の姿とはなし下さるゝ。

○御文二帖目五通なり

道綽決聖道難證。唯明淨土可通入。

○道綽禪師

西河の道綽禪師は。曇鸞大師滅後の御弟子で。七高僧第四番目に御立ちなされた。御幼年の時御出家なされ。初めの間は涅槃宗を宗旨となされた。『却後曇鸞大師の住み給ひたる。汶水石壁の玄忠寺へ御參詣なされ。曇鸞大師の御墓へ參り給ふ處。大きな石碑が立てある。其刻つけてある碑の銘を讀て御覽なされたれは。むかし曇鸞大師菩提流支三藏の教に由りて。仙經をやきすて給ひ。他力淨土門に入せられたとあることを。つら〳〵御覽ありて。時をゝへは今からは百五六十年むかしの上代。其人をいへは我と器量の遙ちがふたこと。道にたとへれは千里もちがふ大德でさへ。自力をすてゝ他力に入らせられた。況んや我末代に生れ。智德おとりた身でありなから。何とて骨を折たりとも。聖道自力の勤めは所詮及はぬこと。夫よりは曇鸞の御あとを慕ふて。他力の道に入り。彌陀を賴むて淨土へ參るに若はなひぞと。御墓の前で涅槃宗の珠數を切りて。淨土門に立ち入せられた。『決聖道難證』とあるは聖道は聖所證の道。八萬四千の自力の法門と云ふは。實か凡夫の手わざに及はぬこと。さとりの目のあひた聖人たちばかり。修行してさとり給ふ道ちやと云ふこと。法華經にも。『無智人中。莫說此經』とあり。大日經には。『甚深無相法。劣惠所不堪』とも御說き

○決聖道難證の釋

○淨土門に入り給ふ因緣

なされて。愚痴無智の凡夫は。擯出られ智者聖人の歴々ばかりを對機になさるゝが聖道門ぢや。〇爾此の聖道門淨土門の二つの名を御たてなされたは道綽禪師より始まる。其聖道門のさとりにくひとあるは。乃ち御製作の安樂集に。二つの由を擧て御示しなされた。「一由下去二大聖一遥遠上」と云ふて佛の御在世なれば。まのあたり如來の加被力に由りて。さとりもすれども其佛御入滅なされて。間遥にへだてたれは。幼兒の父にはなれた如く。なか〳〵ひとり行きはせぬ。それで證がにがたひ。「二由二理深解微一」と。佛法甚深のふかひ道理をあきらむることは。なか〳〵末代凡夫の智惠才覺に及はぬこと。「猫に小判」「牛に麝香。」小判は人間の貨なれとも。猫に見せては石瓦も同前ぢや。聖道門の法は。甚深にたふとけれとも。我等に持せては。猫に小判をあてがふたと同しことで。法は妙なれとも機が及はねは。所詮我等が手わざにはゆかぬほどに。聖道自力の企ことはさつはり廢てしまへと。いひ切て御しまひなされたを。「決二聖道難一證」と仰せられた。〇唯明淨土可通入の釋

「唯明二淨土可二通入一」唯とはてればかりと云ふこゝろで。末代の今出離生死の捷徑は他力淨土門はかりと云ふこと。即ち安樂集に「唯有二淨土一門一可二通入一路」と仰せられた。其意を今の一句にあらはされたものぢや。通入と云ふは。通の字は通塞と反對して。ものゝふさかるに對して。道筋のあひたことを通と云ふ。聖道門八萬四千の自力の道すぢは。末代の今は塞りて往來たへはてた。唯如來の本願他力の道筋ばかりは。我等が通る本海道ぢやと云ふこと。〇時に此の通の字が通用と云ふ時。金銀等いづれも通用の寶なれとも。通寶と銘の鑄てあるは錢ばかりぢや。今世間通用の錢を。寛永通寶と云ふ。錢に局りて通寶と書くはどうなれは。金銀と云ふものは錢よりは位のすぐれた寶なれとも。事に由りては通用せぬことがある。已に銀が西國では通用すれとも。東國では通用せぬ。「乘物にのる身もこゝろまかされず。小判出しては買ぬやき餅。」一歩小判を出して。一文人形もかへまひ。然れは處により事に由りては間に合はぬこともある。然るに錢と云

〇錢の喩

ふものは。西國でも通用すれは關東でも通用する。百貫の物も買れは一文の物もかゐる。物ごとに指しつかへなく。至極勝手のよひ寶。どこでも通用する寶ぢやと云ふことで。通寶の文字がすはりた。今淨土門他力のおしゐ。南無阿彌陀佛の名號は。かの寛永通寶の如く。聖道自力の教は。法が高上にすぐれて有ても。末代今の時は通用せず。たとひ上代のすぐれた時節でも。淺間しひ凡夫の身には。其おしゐは間に合ぬが。今この南無阿彌陀佛は。如來の御在世から。法滅百歳の末に至りて。何時でも通用の法。ひろく十方衆生と誓ひ給へは。聖人にも通用する。凡夫にも通用する。善人惡人。在家出家。男子女人。富人も寒人も。百姓も賈豎も。士農工商の四民。所作がらをかまはず。野山に網を張て鳥をとり。海河に釣をたれ網を引きて鱗の命を取る。漁者獵師の輩までも。賴めは參る信ずれは往生する。いかなる機類にも通用してすきらひなく。佛にならるる徑路と云ふは。たゞこの淨土門他力念佛の御おしゐに究る。

○萬善自力貶勤修の釋

萬善自力貶勤修。圓滿德號勸專稱。

此の二句は道綽禪師。安樂集のこゝろを顯はされて。自力聖道のつとめは勞して功なし。どれほど修行しても。末代の今では勤がみな虛ごとに成てしまふほどに。雜行雜善の自力を捨てゝ。一向專稱の他力に歸せよと誘め給ふ。秖今の御文にてある。「萬善」と云ふは。道綽禪師の御ことばつかひて。善導大師の御釋からいへは。もろ〳〵の雜行のこと。「貶勤修」とあるは。卽ち安樂集に「起レ行修道未レ有二一人得者一」とあつて。末代の今になりては。億々のかずかぎりもなひ衆生の中に。たま〳〵自力の太刀さきで煩惱惡業の怨敵をきりしたかへ。あつはれ我力で成佛せふと思ひたつものがあても。一人として證をうるものはあるまひ。何なれは機教時に乖くと云ふて。法が勝れてあても。機が及はぬ。然れは五濁惡時惡世界。濁惡邪見の衆生は。自力の修行所詮かなはぬことゞをおとしめて。末代の我等に自力をすてさせ給ふ御勸化を。「貶勤修」と仰せられた。「圓滿德號勸

○圓滿の釋

○御文三帖十通の文の意なり

○波羅密此に度と翻す

○名號如屋舍とは選擇集本願章下の釋なり委くば就て見よ

專稱ニ」とは異譯の御經に「圓滿善法等無レ倫」と御說きなされて。即ち南無阿彌陀佛のこと。「圓滿」とは圓はまとか。まんまるて闕滅のなひこと。滿は充滿。物の一杯みち〳〵たこと。「去れはこの南無阿彌陀佛の六字の內には。一切諸佛の智惠も功德も彌陀一體に歸せすと云ふことなし」と。御文にも御意なされて。わづかに六字なれとも。諸善萬行無量の波羅密。凡そ法界にみちみつる善も功德も。法藏菩薩兆載永劫積功累德の御修行によてこの名號の內にこと〳〵くこめをかせられた。功德とある功德。善根と云ふ善根。一つとして取りのこしのなひことは。恰ど十五夜の月に欠目のなひ如く。大海の潮がみちて。不增不減の德をそなへたやうに。心も言も及はれぬ不可思議の名號ぢやに由て。圓滿德號と仰せられた。法然上人は「名號如ニ屋舍ニ」とたとへ給ひて。大工番匠が大勢より。多くの材木をあつめて。日かずをかゝりて立てあげた處で。一軒の家となる。家といへばたゝ一字の家なれとも。其家の中には棟梁椽柱さま〴〵の材木がこもりてある

一つ〳〵はなして見たれは。桁は桁。梁は梁たゝ一いろの役目ばかり。それを仕くはして立あげた處で。一軒の家となる。今も其の如く。法界に散在してある諸善萬行は。一いろの役をつとめ。一色の用をなす桁梁の如く法藏菩薩それを御ひとりの御身に御修行なされて。兆載永劫の年月を經給ひ。つゐに十劫正覺のあかつき。南無阿彌陀佛と名のらせられたは。一ッの家をたてた如く。名を呼ときは一軒の家。其家のうちにいろ〳〵名ある材木がこもりてあるやうに。唯一口に南無阿彌陀佛と稱るは。心やすひ一聲なれとも。此中には無量無邊の功德善根の。桁。梁。棟。椽。敷。鴨居までそろへ立て。御成就ありしゆへ。廣ふ十方衆生の樓が出來る。斯したありがたひ名號の功德が。頼み奉つる一念の處に。こと〳〵く行者の物に成りて。立處に往生の御約束が定り。信決定の上。朝な夕な口に万德の法味をあぢはふて。御報謝を營む身となりたは。まことに難有い仕合おや。それゆへ御文には「この名號は。万善万行の總體なれは。いよ〳〵たのも

○御文二

帖目九通の文なり

○專精心を他に散らさず一心になること

○三不三信誨の釋

しきなり」と御意なされた。「長者富にあかす」何ほど持ちあまる長者でも財ためること嫌ひはなひ。御法義もそれぢや。一念の時功德圓滿の身となりゐたれは。今生に於て世間の財寶には乏くとも。御慈悲からながめたれは。我等が身は功德善根もちあまる長者なれとも。廣大の御恩を思へは。口を閉ぢては居られぬ。此のありがたひ功德の號を。息のかよふ間は。ねてもさめても懈怠せふ道理はなひほどに。專精にこゝろをかけしめて。常によく念佛せよ。餘のことはせず南無阿彌陀佛〳〵と。佛恩報謝の稱名を油斷なく相續せよとの御すゝめを。「圓滿德號勸二專稱一」と御示しなされた

三不三信誨慇懃。 像末法滅同悲引。

斯の御文は道綽禪師。安樂集一部の肝要。一念の信心のことはりを。細に御釋なされたを。祖師上人。今この正信偈にあらはされて。兼て禪師の御德義を讃嘆あそばされた。只今の御文にてある。「三不三信誨」とは。三不信は曇鸞大師の論註に。如實修行相應の義を御釋なされて。「一念の信心を決定せぬから。如來の御こゝろに相應せぬ。それに三つの不相應があて。「一者信心不レ淳。若存若亡故」と仰せられた。是は口に名號をとなへ。心に極樂を願へとも。自力疑心の締れが解ぬに由て。ある時は參るてあらふと思ひ。又ある時はこれではいかゝ參られまひかと。進むでみたり退ひてみたり。半分は信し半分は疑ふ。是れは信心の淳ふなひのぢや。左右した心底では。本願の御注文に叶はぬ。「二者信心不レ一。無二決定一故」後生の一大事は阿彌陀如來を御たのみ申して。御助け一定とたしかに安堵しれは餘所外にどのやうなことが有りても。其方へ心はふらねとも。其領解がたしかになひゆへ。此の佛を賴めは。かうした御利生があり。此の法を修すれは箇樣の利益をうるなどゝ。人がいへはつね其方へかたむくやうになるは。「信心不一」と云ふものでの。本本願を賴む心底が決定せぬからぢや。「三者信心不二相續一。餘念間故。」一たひ御助け一定と覺悟して。去年も今茲も昨も今も。淨土參りを疑はす。御助けの御恩を喜ふ心底になれは。此土の

○如實修行相應とは論註には無碍光如來の名號なりと宣ふ教の如くなる信心の事なり

○像末法滅

なひことなれとも。殘念なは餘念まじりて。自力のこざかしひ心が指し出て。ある時は稱名を御恩報謝と思ひ。又ある時は念佛を往生の業と思ふて一日の内でも朝と晩とて信心の模樣がゝはる。餘念と云ふは自力の念。さまゝ計ふ凡夫料簡。ちつとでもそれがまじると。信心のおとさきがそろはぬ。夫ゆへ是等の心底は。本願には相應せぬぞと御いましめなされた。是れは曇鸞大師の御示し。つゝひて道綽禪師の安樂集に。「淳心一心相續心」と共うらを反して。御勸化なされた。かの曇鸞大師は。「但與レ此相違スルヲ名ニ如實修行相應」と仰せられたばかりで。未だ其三信の姿をくはしふ御示しなかりたを。道綽禪師三つの信心のことはりを御ねんごろに御釋なされて兎角自力をすてゝ佗力にもとづけ。一念に彌陀を頼むて。御たすけ一定の覺悟になれ。夫れか淳心ぢや。夫れか即ち一心おや。夫れがすなはち相續心ぢやと。おろかなもゝ〳〵領解しやすひやうに。事をわけて御勸化なし下されたを。「三不三信誨慇懃」と御意なされた。又「像末法滅同悲引」とは

同悲引の釋

○道綽禪師の御化導

像法。末法。法滅百歳の後の衆生までを。この佗力信心の御勸化一つで。極樂淨土へ御誘引をなされて下さるゝと云ふこと。「同悲引」の同の字は。御師匠曇鸞大師は。像法の時あらはれ給ひて。三不信の過をあげて。自力の計ひを誡めさせられ。御弟子の道綽禪師は。末法の世に生れ給ひて。三信のことはりを誨る自力の計ひを止めて。佗力にまかせよ。一念に彌陀を頼んで。往生を疑ふな。如來の御恩を相續して餘所見をすなと。御師匠御弟子もろともに。像法の上代から。末法々滅の末の世までの。惡人凡夫をあはれませられたを。「像末法滅同悲引」と仰せられた。悲引とは御慈悲の引導と云ふこと。「已」に道綽禪師御在世のむかし。並州汶水と云ふ處に御座なされて。念佛門を弘め給ひてあるが。汶水と云ふは都會の湊で。この邦でいへは大坂のやうな處。人民多くあつまりゐる處なるが。道綽禪師の御すゝめで。殊の外念佛御繁昌で。男女によらず十歳已上の人。手に數珠もたぬものはなかりたとある。有る人。禪師へ申上くるやう。彼方の御德

○欲使云云
安樂集の教興所由下の文化卷末終に引用し給ふ後去を後生とし給へり

によりまして。この汝水の人。みな數珠をもち念佛申しまするなれは。此のものの共は殘らす極樂參りいたしませふやと尋ねたれは。爾時御こたへにこの汝水大勢の中に。三十人ばかりは往生するで有ふかと仰せられたとある。其おはせいの中で。わづか三十人と仰せられたは何にも念佛申さぬものはなけれとも。かの淳心。一心。相續心のまことの信をうる人が鮮矣ゆへ。同しやうに念佛申しなから。極樂參りか叶はぬ。それゆへ彼方御一生の間。御油斷なく三不三信と。信心のわけを委細に解はどきをなされ。約る處本願他力を賴まねは。極樂參りはならぬはとに。自力をすてゝ他力を賴めと。五濁の群生御在世の衆生から。今日の我等迄を。ねんごろに導ひて下された。即ち安樂集の現文に。『欲レ使下前生者導レ後。々去者防レ前。連續無窮。頓不中休止上。爲レ盡二無邊生死海一故』と御意なされて。彼方の御在世御息のつゞくたけは。本願他力の御安心を御すゝめなされたが。末の世に生れおくれたものゝ爲めに。安樂集一部の聖教を賜し給ひ。御ねんごろに御物化なし下された。どうぞ成ふならは。前に生れて法義を聽聞したものは。後に生れたるものに共ありがたさを告けしらせ。後に生れたものは。前に生れたるものに誘はれて。いつれも信心に本づくやうになれかし。どうぞいつ〳〵迄もこの御法義繁昌あり。迷の衆生の底をたゝひて總々みな極樂まいりがさせたひぞと御意あられた。極りなき御慈悲の御化導を。『像末法滅同悲引』と御示しなされた。

一生造レ惡値弘誓二。至二安養界一證二妙果一。

此の一行二句は。道綽禪師。安樂集上の卷。『縱使一形造惡』の釋文に依らせられて。あらはされたる秖今の偈頌にてある。安樂集この上に。大莊嚴論を引せられて。『不二習心專至一。臨終必散亂。心若散亂時。如二調レ馬用二禪』とあるは。一とはり自力の上でなれは。平生から心がけて。臨終の用心をすることぢや。平生の時。何ほど功德善根をつひでも。臨終に及んでは大きに心が散亂するに由りて。つひ夫れで大事の未來を取はづすはど

○安樂集に曰く縱使一形造惡、但能繫意、專精常能念佛、一切諸障自然消除、定得往生、何不二思量一都無二去心一也

に。つねくから心がけて散亂心をおさめよ。散亂する心のおさめやうは

○野馬を畜ふ喩

譬喩へは野馬をとらへて畜いれる如くにせよ。野にある馬をたまくとらへても。是れまて人に馴ぬものゝやに由りて。一向手ではふて人の思ふやうにはならぬ。それを畜入れふと思へは。磴を足にくゝりつけて。めつたに動きのとれぬやうにして置いて。それからそろくしこむと。後には其馬に乗りてゆく時。どのやうになりとも騎者の心の思ふやうになる。人の心を心猿野馬とたとへられて。ちやうどかの野馬の如く。暫くもをちつかぬ騒しひものゝやが。平生からさはがしひ心が。臨終になりてはいよくゝ散亂して。大事の後生を取りはづすことゝやはどに。磴を以て野馬をしいれるやうに。平生の間に。施戒禪を修し。世間の五欲を遠ざけ心をしづめよ。左なければ死さまに何ほど後悔しても糾はもどらぬはどにと。論說にまかせて御勸化なされたは。通途自力づとめの上のこと。しかし若は云ふものゝ。下根下劣の根機つたなひ悪人凡夫。平生の時から心をしつめるこ

ともなるまひ。勿論臨終になりて。妻子が枕上によりそふて。一生の別を悲しむたらは。あらダ殘をしやと妻にも子にも執念がのこりて。一倍心がさはぎたてるであらふ。其もの共に今の敎は。鳥を追ふて水へ入れ。猶のまねをさせるやうなもの。是れは一向及はぬことゝやが。爰にありがたひは彌陀他力の御本願。一生造悪の我まゝものを。平生によらす臨終によらす。賴む一念て禪定觀念の鍬も入れす。戒律精進の鞭もくはへす。散亂麤動のありのまゝで。御たすけ下さるゝが。願力不思議の御手柄ぞと御しらせなされた。

○一生の釋

「一生」と云ふは我等が一期の業報。受けたる壽命のかぎり息引とるまでの事。初めのはどは悪人で有たれとも。中ごろからは善人に成りて。蟲もころさぬやうな心になり。たゝ明ても暮れても後生三昧。たとひ形は在家てゐるとも。心は出家まさりに成りて。念佛申してそ。極樂へも參らふけれ。死ぬる迄悪をつくりづめにしたものが。何に如來を賴みましたれはとて。往生は心もとなひなどゝ。必ず疑ふな。臨終今はの時

まで悪を造りて。些も善心のなひ悪人が。臨終に始めて宿善開發して。如來をたのむ一念の信心ばかりて佛になして下さるゝ。諺に『悲ひ時の神たのみ』と云ふ言がある。平生は佛とも法ともしらす。まだ地獄の沙汰を聞てもそりやなひことぢやなどゝ。大切の佛法をそしり。人の信をさまたげるやうな大悪人。臨終際まで其根性てゐたものが。『刀風一至。百苦湊レ身』と。死しなになて。斷末摩のくるしみが身に逼りて來たとき。始めて彼尊をたのむ一念の信心がさしあらはれた。世間の人情でいはふならは。日頃の無沙汰。言語道斷と。詎もかまひ手はあるまひ。然るに阿彌陀如來の御慈悲は。その平生御無沙汰申した悪人が。臨終の手ゞめになて。身のくるしさから。私を助けさせ給へと。一念頼ひはかりで。直に點頭かせられ其ものを佛になして下さるゝが。第十八願の御約束にてある。そこを『値弘誓』と仰せられた。しかし是れは臨終になて。始めて宿善の開けた人ぢや。但し若あればとて。いづれも一大事を臨終まですて置くは大きな不覺

○斷末摩　末摩此に身筋と云ふ臨終に此身筋斷ゆるなり

○値弘誓の釋

一大事の後生と氣がつひたらは。平生に頼むにてしたることはなひ。臨終は當られぬ。實然れは面々いそがねはならぬ。『たちやすき人の命は蠟燭の火の滅ぬ間に信をとれかし』と。蓮如上人は御催促なされた。まつくろな闇の夜でも提燈もては足もとは見える。去れは蠟燭の火とたとへられたは我等一生五十年の命。段々命の蠟燭も減り。まう殘りて五分か一寸。まだ此間には後生願へはねがはれる。寺參りしたけれは參り下向もなる。いでや命の蠟燭の火のきへぬ間。足もとの明ひうちに信を取て。極樂參りを安堵せよとの御勸化にてある。『値弘誓』とは値は信ずること。信せされは値さるが如し。何ほど聽聞しても。雜行も廢らず。自力もやまず。本願不思議を疑ふものは。値ふたが値ふたにたゝぬ。まことに値ひたてまつるとは。夫の淳心。一心。相續心。御助け一定の覺悟に成りて。あけくれ御恩を喜ふ同行が。實に本願にあひ奉りたる姿ぢや。『枯木不レ値レ春』と云ふて春になれは梅花を首として。一切草木の花が。われもくと見事に咲く。

○蠟燭の火の喩

○枯木不値春

○面授口訣法門をまのあたり口つから授かりし事也

これが春にあふたしるし。幾春を迎へても。去年も今年も枯木ばかりは花がさかぬ。すれは春にあひながら枯木は春にあはぬと云ふものぢや。祖師聖人の御流をくみ。同しやうに御門下に列りて。淺からざる御勸化を。飽まて聽聞しながら。雜行雜修の心もすたらず。信心決定の花の咲ぬは。それは本願にあふたでなひ。然るに一念の信をえて。實に本願にあふたものが。此度目をふさぐと。直さに報土に往生して。無上涅槃のさとりを開くそこを『至二安養界一證二抄果一』とあらはされた。（是れは專ら當機に就て辨す若結緣の機は今生に信とはすといへども つねには遠生の結緣となるへし今祖意と親ふに專當機にあり此こと委細に辨すべし）

善導獨明佛正意。矜哀定散與逆惡。

善導大師はもろこし唐の世にあらはれ給ひて。まのあたり道綽禪師面授口訣の御弟子で。他力眞宗の安心を御相承あそばされた。御俗姓は朱氏。臨終細と云ふ處の御むまれ。御幼年のみぎり。ある寺にまうで給ひ。淨土の曼荼羅をおがませられ。始めて極樂のたふとひことをさとり給ひて。我れ願

○善導大師觀經を得給ふ因緣

くは阿彌陀如來の極樂世界に往生を遂たひと。深く心に願を發し給ひ。さて其極樂へ參るに付ては參りやうを知ねは。願ふても詮なし。定めて釋尊一代の御經の中には。委く說きておかせられたで有ふと思召し。經藏に入せられ。仰き願くは三世十方の諸佛。弟子善導が心念をしろしめされ。極樂參りの道すぢを授けさせ給へと。數千卷の御經のうちを目をふさひて兩の御手で探り給ひたれは。何か一卷の御經が御手にあたりたはどにおし戴かせられ。御目を開き見給ふところが。則ちいづれも平生聽聞の觀經ぢや一遍さらりと御覽なされたれは。十六觀法のことが具に說てある。いづれ後世の一大事。先つ知識を求めたしと。方々を遍參し給ふ時。幷州の晉陽と云ふ處に。道綽禪師あらはれ給ひ。さかんに他力往生の道を御弘めなさるゝにあはせられ。直に道綽禪師の御弟子となり給ひ。始めて如來の本願を信し。他力往生のことはりを。明に御決定なされ。七高僧第五番目の知識とは立せられた。時に「善導獨明」とあるは。七高僧の中で。善導大

○善道獨明

の釋

○觀經疏を造り給ふ因緣委くは疏の奥書の文に出づ披き見るべし

○丹誠 まこゝろなり

○上來云云

師御ひとりが。如來の御意をあきらめ給ひたと云ふやうに聞ゆれとも左右ではなひ。是には緣故のあることで。そも〳〵善導大師。つら〳〵觀經を御覽なさるゝに。何とやら顯彰と隱說との訣が違ふてあるやうに見ゆる。得とうかゝひおはせたらは。尤も難有い意味があらはれさふなものぢやと思召された。實夫れは聞へた。本この觀經には。先立て天台の疏。淨影の釋。其外の諸大德觀經の註釋をあらはされたを。あれこれ鑒み給ふ處。兎角それでは底ずみがせぬ。此上は自力に及ひがたし。佛の加被力をゐて。御經の正義をあらはしたひと。三世十方の如來へ。願をこめ給ひて。我今この觀經の疏を作りて。未來の衆生を救ひたふ存じまする間。何とそ佛の御力らで。この經の正意を示させ給へと。丹誠を抽んで給ひてあれは。其御願に應じて種々の不思議奇瑞を感得なされた。中にも每夜一人の僧來らせられ。玄義の科文と云ふて。觀經の底意のありがたひ譯を。ことをわけて御手引なされたはどに。善導大師深〳〵觀經の旨をさとり給ひ。「上來雖

散善義の文なり

○散善三福散善は九品なれども世戒行の三福より開きし故三福と云ふ也

○鳥を捕ふる喩

說二定散兩門之益一。望二佛本願意一在レ衆生。一向專稱彌陀佛名上」と。觀經を一〳〵にして。定善十三の觀法。散善三福のもろ〳〵の雜行。觀經に說きてはあれとも。それは顯邊の方便に說き給ふた。隨他の法門。實たとへは囮の如くぢや。鳥をとるに一羽の鳥を籠に入れ。それを出して置けはつれの鳥どもが其鳴聲を聞きてそこへあつまる。處をすかさずとらへるとぢや。其籠に入れて出しておく鳥を囮と云ふ。今この觀經に觀念のことを說いたり。余の功德をつとめて極樂參りの因にすることを說きて置せられたは。かの囮と同しこと。定善の觀念好なものや。三福の雜行ずきなものを引よせる爲めに。且く說ては見せ給へとも。如來本願の正意は觀念にあらず。本より三福の雜行にもあらず。たゞ定散二善の自力をすてゝ。一向專修の領解に本づき。御たすけ一定。南無阿彌陀佛で。眞實報土の往生をとゞくるぞと敎へ給ふ處が。他宗の學者等とは大にかはりて。本願他力のまことの道を。善導大師獨御弘めなされたぞと御しらせなされて。「善導獨

○定機の釋
○玄義分に曰く定卽息慮以凝心、散卽廢惡以修善

○十三觀
日想、水想、地想、寶樹、寶池、寶樓、華座、像、眞身、觀音、勢至、正、雜の十三觀なり
○散機の釋

○逆惡の釋

明二佛正意一と御意なされた。■「矜二哀定散與三逆惡一」とは。定は定善「息慮以凝心」と。善導大師御釋なされて。妄念をやめ心をしづめて。極樂淨土の依報正報の莊嚴を。此に居なからおがみたひと思ふて觀念すること。卽ち觀經に初め日想觀から。終り雜想觀に至るまで。觀念の仕やうを十三いろに說きわけ給ひた。この觀念を修するを。名けて定善と云ふ。總じて人には定機散機と云ふて。生れつきか二やうある。定機と云ふは生れ付きて心のおさまりて靜なものゝこと。其定機の爲めには佛定善を敎へて。觀念を修せよと御すゝめなさるゝ。又散機と云れは。生貫の掉擧ひものぢやゝ其ものは心を鎭めて觀念は出來ぬに由りて。廢惡修善と云ふて。惡をすてゝ善を修することをつとめよと敎へ給ふを散善と云ふ。是は觀經では。下の九品段に至りて。上六品の施戒行の三福の功德を說きておしへ給ふが散善と云ふもの。時にこの定善の人。散善の人は。いづれも大善人ぢや。さて「逆惡」とあるは。觀經の下三品に說きてある輕次重三段の惡人。惡と云

○十惡
殺生、偷盜、邪婬、兩舌、惡口、綺語、妄語、貪欲、瞋恚、邪見

○一切云云
觀經玄義分の文なり

○矜哀の釋

ふは十惡。我等が一生涯身になし口にいひ心に思ふ罪僣。逆と云ふは五逆父をころし母をころし。佛の御身より血を出す等の。恩田福田にそむひた大惡人。しかるに善導大師其善人惡人を。平一面に御あしらひなされて。自己は定散の善人で。あつはれ觀念をする。功德をつとめると。必ずそれを功にたてな。其自力の才覺では眞實報土の往生はならぬぞ。罪おもく障ふかひ惡人ぢやとて。必す身をひくな。往生の道には身を卑下するが邪慢になる。「一切善惡凡夫得レ生者。莫レ不下皆乘二阿彌陀佛大願業力一爲中增上緣上也」と御釋なされて。定散の善人も彌陀の願力で參る。五逆十惡の罪人も。御慈悲にすがれば往生するぞと。一切善惡の凡夫あひてに。何れも本願他力の御かげで。極樂參りするぞと願はして下されたが善導大師の御化導。「矜哀」の字は。大經に「矜二哀三界一」と御說きなされたは。佛の衆生をあはれみ給ふ御慈悲のふかひこと。二字ともにあはれむと云ふ字なれども。つゐさつとあはれむではなふて。深く懷に横たはりて苦にすることぢ

や。「門に立ちもの乞ふ辭をきゝならは。あはれと思へ物くれずとも」乞食非人などの寒天に赤膚を出してゐるやうなを見ては。さても不便と思ふて物でもとらせなどすれとも。見た時不便と思ふたはかりで。何も苦になるはとのことはなひ。つゐわすれて仕まふ。然るに親が子を不便がるはそれとは違ふ。「哀々　父母生レ我苦勞。」よひにつけ。わるひにつけ。年が年中我子のことを苦にするが親の因果ぢや。是れは可愛あまり苦になるのぢや夫れで親の恩は「昊天罔レ極」と云ふ。實むかし王褒と云ふ學者。父の王義冤にあふて死んだをなげき。墓のほとりに盧をむすんで書生をよせ。學問を業にして居たが。弟子が寄て詩經をよむに。蓼莪の篇の「哀々　父母生レ我苦勞」とよむことに。身もだへして泣かなしまれた。弟子が氣の毒に思ひ。後には詩經をよむに。蓼莪の篇ははぶひて讀なんだとある。夫れにつひて思ふに。今善導大師の我等を矜哀し給ふとあるが。即ち骨肉の親の慈悲。道理こそ「大唐相傳云。善導是彌陀化身也。」光明寺の善導大師は

○王褒か孝なる事

○大唐云云

阿彌陀如來の御化身ぢやと。唐で申しふらしたことぢや。御化身とあれは直に阿彌陀如來。迷の我等を子の如く哀み思召す。平等の御慈悲から。定散は善人。逆惡は惡人。善人は善人なれとも。定散の自心に迷ふて。金剛の眞信にくらく。他力の方角を知らねは。夫れを不便に思召され。又四重禁を犯し。五無間業を造りた惡人の衆生は。未來地獄の呵責のがれはなひに由りて。それは猶は不便に思召し。親が子の事を苦にするやうに。いろいろ御心勞あそばされ。善人惡人もろともに。如來の他力を頼ひて。早ふ樂邦へ參れと。弘願眞實極樂の徑路をねんごろに諭し下された御慈悲の御勸化。他人ひきのことではなひ。骨肉の親の慈悲ぢやはとに。これを聽聞するものは泪を流して。ありがたふ御受けを申せとあることぢや。

選擇集の文なり

○四重禁、殺生、偷盜、邪婬、妄語なり

光明名號顯因緣。　開入本願大智海。

凡そ一切の諸法何ごとによらす。因緣をはなれたことはなひ。況んや生死の迷を離れ。涅槃のさとりに至るに付ては。取りわけ因緣がそろはねばな

らぬ。因は種と云ふこと。佛になる因は何ぞといへば。涅槃經に「一切衆生悉有二佛性一」と御說きなされて。人間は云ふに及ばず。天地の間にいきとしいけるものに。佛性を具ぬものはなひ。是れか佛になる因ぢや。さて其佛性が衆生の心の內に。凝然として何ぞ一塊あることかといへば。左右ではなひ。「春ごとに匂ふ吉野の山櫻。木をわりて見よ花の影かは。」春を迎ゐれは吉野初瀨の山櫻。嶺も麓も一面に。雪の如く見ごとに咲た。人有りて花を造りたてなし。時をゐて咲た花は。元來咲くべき種か櫻木の中に在りて。其れか春の陽氣にめぐまれ。自然と咲たものなれども。木の中に種か有るかと云ふて。冬の內に木を破りて見ても。何も花の種らしひものはなひ。夫れでも花の咲た處で見たれは。さては木の中に花の種は有りたりとしる如く。一切衆生。佛性を具へたれはとて。是が佛になる種と形のあるではなけれとも。修行成就して光を放つ佛に成た時。さては其身に佛性の因を。宿て具へ居しものをと知らるゝ道理ぢや。しかし咲くべき

○古歌

○月影の喩

○不信云云大經の文なり

花の種を。木の中に持つてゐても。春の陽氣にめぐまれねは花は咲ぬ。內にそなへた花の種は因。催しそだてゝ咲かす春の氣は緣。一切衆生。佛性の種を身にそなへたは因。諸佛如來の御化導にあづかり。修行成就してさとりの花を開かすは緣と云ふものぢや。斯した道理ちやに由りて。在座の面々殘らすみな佛性を具へたに違ひはなひけれとも。こまりたことは我等が身。今では佛性がなひと同しことぢや。譬たとへは水にうつりてある月影も。泥をうちこむでかき濁せは。忽ち月影は失へる如く。本有常住の佛性の月影。心の水に浮んだれとも。我等煩惱惡業の泥をうちこむでかき濁したに由りて。佛性の月影は何方へか亡てしまふた。其癖「不レ信二先聖諸佛敎法一」磯邊に遊ふ魚鱗も。漁人が網をもつて歩みよれは其あし音を聞て逃ちり。水底に潛みかくれる如く。三世の諸佛敎の網をひろげさせられ。助けたひとよりかゝり給へは。夫れをきらふて逃けまはり。生死の海の水底へひそみかくれて仕まふたが。常沒の凡夫。我他が身のうへ。佛性の因

○大經に曰く、狹谷追レ命、無レ得ニ縱捨一、

はとりうしなひ。歎の御緣はさらふて逃げる。何を因に佛に成ふそ。何をたよりに成佛せふそ。佛になるへき因も緣も。みな取りうしなふてしまふた。「つくりこし罪を伴にてたゝひとり。泣々こゆる死出の山路。」從來の惡業を身の錘として。三惡道の水底に。永劫沈むより外にあてのなひ我等をありがたひは如來の大悲。名號を因とし光明を緣とし。他力不思議の因緣で。思ひもよらす此のたび極樂へ參らせ。無上佛果の佛になして下さるゝ若るたふとひ御利益を。善導大師くれ〳〵御勸化なされたを。「光明名號顯ニ因緣ニ」と仰せられた。實「開ニ入本願大智海ニ」とは。即ち禮讚に「彌陀智願海。深廣無ニ涯底ニ」と偈頌を顯はされて。如來の本願は。法藏菩薩無漏清淨の御智惠から發し給ふ。御智惠で出來た本願ぢやに由りて。智願と目け給ふ。海と云ふはうみのこと。海は深ふして底がしれぬ。彌陀の本願は大海の如く。十方衆生の流をおさめ給ひて。遲もしれず底もしれぬ御本願ぢやと云ふことで。「本願大智海」と仰せられた。この彌陀の本願智惠の海へ。御助け候への一念の處で。信心の智惠がすはる。そこを「開ニ入本願大智海ニ」と仰せられた。開入とは開示悟入。自力疑心の執情で。胸の中を閉ふさひで有た處。如來の御方便で。始めて聖人善知識の御勸化がとゝさ自力の迷を開いて下されたに由りて。たちまち信決定の落著の出來た處を開入と云ふ。實むかしもろこし舜の世に天下毎度の水難で。万民殊の外難儀に及んだ。凡そ四百餘州の間に。江淮河漢などゝ云ふて。大きな河か九つある。然るに年々土砂がはせこむて。河々がうづまりたゆへ。大雨でもふりつゞくと。遽に水がまして方々の河々の堤がきれて。田地をそこなひ家が流れ。人死もおびたゝしふ有りて。万民歎きに沈むた。其時夏の禹王舜王の臣下て居られたが。君命をうけて。天下中河さらへの奉行をたつた一人して勤められた。前後八年の間は。外を家としてはられた。三度も我家の門前を過られたれとも。ちよつとも内へ入らず。蹤の緒をしめはいて。天下中の河々を奉行せられたが。とう〳〵八年目に諸方の河普請が

○開入本願大智海の釋

○禹王河を治むる事

出來て。河々の水が滯ほりなく大海へ落ちこむやうになり。何ほど大雨がつゝひても。河ぎれの難もなく。民百姓いづれも安堵して喜んだとある。廣い大國の大河ともを。一人奉行して仕あげられたは。後にも先にも双なひ功勳ぢやと。申し傳へたことぢやが。今恐れながら善導大師の「開入本願大智願」の御手柄が其やうなもので。阿彌陀如來の御慈悲は大海の如く我等が信心は河水の如く。彌陀智願の廣海に。凡夫善惡の心水の流れ入るやうに。頂て機法一體に御成就あられし處。定散自力の瀬が高ふなり。貪瞋煩惱の芥がかゝりて。他力信心の水を淀ますに由りて。これを哀み思召し。善導大師大心海より化現なされ。貪瞋二河の河普請を初めさせられ。定散兩門の瀬をつけかへ「共發金剛心」の堤塘を固め。信心守護の御奉行役のこる處もなふ御心をつくされてあれは難有い。今は在家止住の我々までも往生安堵の思ひに住し。御恩たふとや南無阿彌陀佛と。昔者も今日も信心相續の水の流に滯りなく。大悲の海に流れ入りて。やがて參らるゝれし

○和讃に曰く大心海より化してこそ善導大師とかはしける末代濁世の爲にとて十方諸佛に證をこふ

○又曰く善導大師證をこひ定散二心をひるかへし貪瞋二河の譬喩をとき弘願の信心守護せしむ

やと。歡喜踊躍のよろこひを得させ下されたは。偏へに善導大師。御化導の御蔭にてある。

行者正受金剛心。慶喜一念相應後。
與韋提等獲三忍。即證法性之常樂。

這の偈文二行四句の中。一二の句は觀經玄義分に「歸命正受金剛心。相應一念後。果德涅槃者」とある文に據り給ふ。便ち聖人化身土卷に。「言教我正受者。金剛眞心也」と御意なされて。「正受」は三昧の譯名。この三昧は念佛三昧。即ち我等が雜行すてゝ彌陀を賴み。信心堅固の覺悟にもとづきたを。「正受金剛心」と仰せられた。時に善導大師專ら他力信心を以て金剛に御たとへなされたは。「金剛無漏證。」眞言宗では如來の佛智を金剛心と云ふと敎へらるゝ。然れは凡夫の淺ひ心をいかほどにもち固めても。それを金剛心とはいはぬ。今は阿彌陀如來の佛智の一念が。行者の胸の中へのりうつらせられたを金剛心と云ふ。天竺で縛日羅。こゝに翻じて金剛

○正受金剛心の釋

○金剛云云文に曰く言金剛者卽是無漏之體也

と云ふ。「金中精牢者」とありて。黄金の中で最ちかたひものぢや。不壊の義。堅牢の義など云ふ徳がそなはりてある。實時に一切の物にわたりて。

○相生相尅の事

相生相尅の道理があて。相生の義をいへは。木は火を生し。火は土を生すると云ふやうに。せんぐり〳〵物を生だしてゆく方ぢや。相尅と云ふは。これは物をやぶる方で。土尅水と云ふは。土は必す水にかつ。井水でも土で埋むと水が出す。清潔な水でも。土をうちこめば忽ち濁る。これは土の水にかつのぢや。其水にかつ土も木にはまける。木はいかなるかたひ土の中でも。自由にをし破りて根が蔓る。これは木の土に尅たのぢや。土にかつ木なれとも。金にはうち碎かれてしまふ。木にかつ剛ひ金なれとも。火にかけると忽ちとける。これは金が火にまけるのぢや。然るにかの金剛ばかりは。どのやうにして火にかけてもとけると云ふことなく。百年水につけても色のかはると云ふことはなひ。是れが金剛不壊の徳ぢやが。「貪愛如レ水。喩レ染二汗善心一」をしひはしひ可愛不便と思ふ愛欲貪欲は。善根功徳

○散善義に曰く水波常濕レ道者、

即喩下愛心常起能染中汚善心上也、又火欲常燒レ道者、即喩下瞋嫌之心能燒中功徳之法財上也、

をぬらしけがす。ちやうど水の如くぢやと喩へられ。「瞋恚如レ火。喩レ燒二功徳寶財一」一念瞋恚のはらたちは。やかてそれが地獄の猛火。我等をのせてゆく火の車となる。たかぬ火の胸にしもへてくるしさは。心の鬼の身をせひるなり。切角たくはへた功徳の財も。たつた一時に燒いてしまふは瞋恚のはのを。其をそろしひ貪欲瞋恚の火と水が。常住胸の中にたゝかふて。暫くもやむ間のなひ我等が身が。この度宿善にもよふされ。一念歸命の信をゑたれはありかたや。「斯心深信如二金剛一」瞋恚の火でこがせとも。信心に疵もつかす。貪欲の水にぬらせとも。歡の色もかはらす。煩悩妄念のきそひおこる中からも。御恩を思ひ出しては。さてもたふとや有難やと。生涯御慈悲を相續して。無上涅槃の妙果を待つ末一段になし下されたは。金剛心をゑたる同行の身の仕合せぢや。

○慶喜一念相應後の釋

「慶喜一念相應後」とは。慶喜は二字ともによろこぶと云ふ文字で。本願不思議の御こゝろはりを聽聞してさて〳〵うれしやと。始めて如來に歸命する時を慶喜の一念と云ふ。相應

○與韋提等獲三忍の釋

○五體左膝、右膝、左手、右手、頭

後とは。相應は互ひに相ひかなふことで。如來は惡人凡夫を其まゝで助けたひと思召す我等はこの惡人を助け給へともちかける如來の御慈悲と。行者の信心とが。機法たかひに相稱ふた處を相應と云ふ。後とは信をゐぬ前に對して。信領解の時を後と仰せられた。「與二韋提一等獲三忍一」とは。韋提希夫人は摩迦陀國王舍城の主。頻婆娑羅王の后。一子の阿闍世太子の爲めにせめさひなまれ給ひて。身のくるしひ難義から。心に念言して。釋迦牟尼如來へ御なげき申されたれは。世尊遥かに其心念をしろしめし。靈山法華の會座を沒し給ひ。阿難目連の御弟子もろとも。韋提希夫人の王宮に降臨あられた。爾時夫人五體を地になげ。世尊へ言し上らるゝやうは。妾一人の子の爲めに。かやうの苦患にあひまするが。さて〳〵否な閻浮提濁惡の世のありさま。はつこり懲はてました。願くは未來惡人を見す。惡人の名もきかぬ處へ生れたふ存じまするに御歎き申されたに由りて。光臺現國の其中に。極樂をおがませ給ひ。其うへ觀無量壽經を御說きなされて

○心歡云云

韋提の得忍に就ては定善示觀緣の下とし或は第七觀とし又は得益分とす此文は心歡喜故、

あるが。第七の華座觀に至りて。世尊夫人に告げ給ふやうは。諦聽々々あきらかにきけ〳〵。今汝が爲めに苦患をのがるゝ法を說きてきかすぞと仰せられたはとに。韋提希夫人さてありかたやと。如來の御口もとを守りて御座る處。「說二是語一時。無量壽佛。住二立空中一」と。釋迦牟尼如來。未だ其ことを說き給はぬさき。今說くそと仰せらるゝ御言の下に。正眞の阿彌陀如來。光明を放ちて虛空に立てあらはれさせられた。韋提希夫人はこの阿彌陀如來をおがみつけて。「見二無量壽佛一已接レ足作禮。」さてもありがたや我を救ふて下さるゝ法と云ふは。彼尊のことであるものをと。一念喜はれた時。「心歡喜故得二無生忍一。」と其座にありながら往生の大事を決定せられた。其決定心を善導大師御釋なされて。喜忍と名つけ。亦は悟忍と名つけ。亦は信忍と名つくと仰せられた。喜忍と云ふは。うれしや有かたやと御恩を喜ふ姿。悟忍と云ふは疑はれて往生は決定と覺悟のすはりたこと。信忍と云ふは本願不思議を信して一念も疑はぬ心。これが韋提希夫人其座

應時即得無生法忍の略文なり

○應聲即現第七觀の釋迦除苦惱法を說かんとして彌陀聲に應じて現じたる事なり

にありながら。往生のしるしとある無生忍の智惠をゆられた處ぢや。昔し韋提希夫人は應聲即現の佛體を拜んで。往生を決定せらるゝ今日の同行は本願の御ことはりを聽聞し。南無阿彌陀佛の號を證據に。御助け一定とおちつひた。昔しの韋提希は。目に如來をおがむで往生が定り。今日の面々は。耳に如來の御慈悲を聽聞して。一念の時に極樂參りが定りた。此の覺悟に本づけ下され。信心歡喜のよろこびを得たは處。昔の韋提希夫人に些もかはらぬ無生忍。追付淨土に往生して。眞如法性の覺をきはめ。涅槃常住のつきせぬ樂の身となし下さるゝ。そこを善導大師觀經玄義分に。「捨二此穢身一即證二法性常樂一」と仰せ置れたを。祖師聖人今この正信偈にうつし給ひて。「即證二法性之常樂一」と御意なされた。人間の樂は電光の如し。この娑婆でも相應に樂み事がなひではなけれども。せんぐり遷りかはりて。樂は苦の端。喜ひは悲みの本。目出たひ〳〵と祝ひ壽くことも。覺はやれかなしやでは。闇の電光きらりとひかりた處では。蟻のはう迄も見ゆ

○即證法性之常樂の釋

○源信僧都の事

○寛仁元年

たれとも。あとがまつ黑闇。ゆきかゝりた者は一倍難儀する。この世の榮花たのしみが。其やうなもので。樂しむ間は須臾。追付あとが嘆きに成りては。昔しを思ひ出して一倍の〳〵くるしみぢや。是れは墓なき人間のありさま。今極樂は涅槃常住の國。いつ〳〵までもうつりかはらす。永き世目出たひ果報をゆさせ下さるゝを。「即證二法性之常樂一」と御勸化なされた。

源信廣開一代教。偏歸安養勸一切。
專雜執心判淺深。報化二土正辨立。

横川の源信和尚は。七高僧第六番目の御相承に立せられ。御身は天台宗でありながら。御領解は如來の本願。念佛往生の道を御つたへなされた。御俗姓は卜部氏で。大和の國葛木郡の御ひまれ。御年七歳の時。叡山に登らせられ。慈惠僧正の御弟子として。天台。眞言。顯密の奥義をきはめ給ひて有たが。御年三十すぎて。浮世の名利を深く厭はせられ。自行化他たゝ念佛を粹として。往生の近つ〳〵を待ちうけ給ひたが。寛仁元年六月十日。

御一條天皇の御宇なり
○廣開一代教の釋

○夫往生等往生要集の文なり

春秋七十六歳で。目出たふ往生の素懐を遂けさせられた。『廣開一代教』とあるは。日本將來の五千餘卷の大經を。くりかへし〳〵御覽なされた處兎角末代の今は彌陀の本願。念佛一門が成佛の捷徑ぢやと見きはめさせられて。『夫往生極樂教行濁世末代目足也。』人の體で正に入用なものは。兩の目と兩の足。如來の本願南無阿彌陀佛は。我等が爲めには兩の目の如く兩の足の如く。本願の御慈悲で後生の一大事を見開ひたは。何と目の如くではなひか。願行の腰のぬけたものが。願力の不思議で此度西方の往生を遂げるは。直くに本願が脚腰とならせられたではなひか。男女貴賤のゐらひなく。行住座臥の威儀にかゝはらず。處をきらはす時をかまはす。野でも山でも口にうかふにまかせ。南無阿彌陀佛と申すに。何の障はなひ。實に末世濁亂の我等が身に相應した法と云ふは。念佛往生の一門はかりぢやと。かたて打ちに極樂參りを御すゝめ下されたが。源信僧都の御化導にてまします。『專雜執心判二淺深一。報化二土正辨立』とは。即ち僧都御撰述の

○往生要集下未に廣く釋せり大文第十の下就て見よ

往生要集に。專修雜修の得失を顯し給ひて。雜修のものは。執心不牢固。專修の人は執心牢固。雜修の人の心底は。極樂を願ひながら。心か決定せぬ。心の決定せぬは信心が淺ひと云ふもの。專修の人はこれにかはり。心金剛の如く決定して。一念も往生を疑はず。其心底は直に阿彌陀如來の大悲心ぢやに由りて。それを得て喜ふ機は愚痴の尼入道なれとも。得たる信心は他力のまこと。『深廣無涯底』の底のしれぬ。御慈悲のまゝを下された信心なれは。信心の深ひことこの上はなひ。時に專雜とある。專は一なり彌陀一佛を賴み奉りて。わき目をふらぬこと。それて御文に『一心一向と云ふは。阿彌陀佛に於て。二佛をならへさるこゝろなり。』那はとけをも賴み。這はとけを念じ。かず〳〵の佛菩薩に賴みをかけて置いたらは。總々樣の御力で。佛にもなりやすからふ樣に思ふたはおろかな凡夫の迷こゝろ兼好が徒然草にも。『硯箱に筆の多ひと。家の内に子供の多ひと。持佛堂に佛の多ひは好からぬものぢや』と云ふて置れた。專修一向の案内は知らぬ

○大經に曰く如來智慧海、深廣無涯底、二乘非所測、唯佛獨明了

○專雜の釋
○御文二帖九通の文なり

○されは云云 寶章二帖九通の文なり

とも。わき目から見ても。ほとけをかゝ〳〵ならへて頼み處の多ひは。見ぐるしふ思ふと見えた。今は一心一向の安心。「忠臣不レ仕二君一貞女不レ見二
兩夫一」「されは人間に於ても。主をばひとりならでは頼まぬ道理なり」と
御示しなされた。「良禽擇レ木棲。良臣擇レ主仕焉。」三世十方の諸佛の中
に。本師法王とすゝれさせられた阿彌陀如來。殊にこの惡人凡夫を御目が
けなされ。助け下さるゝ御ほとけぞと思ひ定めて。一念彼尊を頼み奉る行
者の身は。卽今余所外に。いかなる目さましひ枯木に花が咲た。白銀の餅
が產たと云ふやうな事があらふとも。いさゝか其方へ心をふらす。身も心
もうちこむて。如來の御慈悲に任せた姿が。專修一向の領解と云ふもの。
然るに雜修の人は。本が自力ぢやに由りて。御經をよむも往生の業。花を
立て供養するも極樂參りの土產。勿論念佛申すも往生の業と。此方からあ
てがふてかゝるは。みな自力の執心。其自力執心では。疑惑中悔して何ぞ
と云ふとうろたへか來て信心が相續せず。極樂參りがゝなはぬほどに。眞

○報化二土正辨立の釋

實報土の往生がとげたくは。淺はかな雜修自力の執念をやめ。如來の同向
に歸入して。一向專修の領解になれと。事をわけてねんごろに御勸化なし
下されたを。「專雜執心判二淺深一」と御意なされた。「報化二土正辨立」と
は。報土と云は因願酬報の義で。卽ち光明壽命の誓願にてたへ給ひ。御願
の通りにあらはれた御國ぢやと云ふことで報土と云ふ。化土と云ふは方便
化身の土。極樂世界は「唯報非化」と云ふて紛もなき報土なれとも。其中
に方便化身土と云ふがわかれてあるはどうなれは。「老年花似二霧中看一」と。
梅櫻の花を。青年時分に見た時は。あざやかに見わけられたれとも。年上
りたれは目がゝすむで。八重一重のわかちも見えず。ちやうど霧霞をへた
てゝ。向の物を見るやうに思はるゝ。是れは花の過ではなひ。觀者の目の
かすむだのちや。「恢廓廣大超勝特妙」の國は。一種眞妙の報土なれとも。
他力の信者なれは。佛智見をゐさせ下さるゝに由りて。眞實報土の全體を
子細におがめとも。雜行雜修疑心の善人が。其報土へ往生すれは。自力疑

○恢廓云云 極樂國土の事なりこは大經の文なり

心に隔てられて。智惠の眼がゝすむに由て。廣ひ報土を狹ふおがみなす。それを化土と云ふ。即ち往生要集に。菩薩處胎經を引て。西方此を去ること十二億那由多にして。懈慢國と云ふ淨土がある。其懈慢國は娑婆などゝは違ふて。つねに快樂を受けて。少しも苦のなひ處なれとも。眞實の報土でなし。方便化土の一つぢや。時に億千萬の衆生が念佛申して。極樂へ參る〳〵と思ふて。參りた處が多くはこの懈慢國にとゞめられて。眞實の彌陀の淨土へ參るものが少なひ。大勢の中にわつか一人進んで。彌陀佛國に往生すると。眞實報土へまいりての少なひことか說いてある。源信僧都この處胎經を御引きなされて。同しやうに念佛申しなから。報土往生のかなはぬは何ゆゑなれは。雜行雜修の煩ばしひ自力の計ひが邪魔になるほどに飛ひこへて眞實報土へ參りたくは。雜行をすてゝ正行に入り。雜修をやめて專修一向の領解になれと。他力信心のおちつき場を御ねんごろに御示し下された。

○往生要集下末十一丁の文なり

○要集に曰く若不二雜修一專行二此業一此卽執心牢固定至二極樂國一

○明惠上人

昔し栂尾の明惠上人と。笠置の解脫上人とは。春日大明神深〳〵御歸依なされて。二人の聖の春日の社へ參らるゝ度ごとに。明神たへなる御聲をあらはし給ひて。しみ〳〵御ものがたりなされた。然るに明惠上人に御物語の時は。饌をかゝげて御神體をあらはし給ひ。あり〳〵とおがまれさせられた。解脫上人に御ものがたりの時は。いつでも饌をへだてゝ御神體がおがまれ給はぬ。解脫上人この事を不審に思ふて。御物語の序に明惠。解脫は我が兩の手ぢやと。したしみ思召さるゝ明神の。何とて明惠には御姿をあらはしておがまれ給ひ。我には饌をへだてゝおがまれ給はぬは何いたしたる義そ。甚た不審千萬に存じ奉りまするとと申し上られたれは春日明神。饌の中よりの御こたへに。我かつて汝をへたてる心はなけれとも。其方が心に我か學問は明惠にまさると。一分自慢の心があるゆへ。其慢心が饌と成りて。我が姿をへだてたるぞやと。あきらかに神勅あられたほどに。解脫上人恐れ入りて。深く慚愧懺悔なされたと云ふことがある。今も其の如く。廣大無邊際微妙不思議の眞實報土を。或は百由旬或は五百

○解脫上人の事

○大經に曰

く、其胎生者、所レ處宮殿、或百由旬、或五百由旬と、又曰く其胎生者、皆無二智慧一、於二五百歳中一、常不レ見レ佛、不レ聞二経法一、不レ見二菩薩諸聲聞衆一云云

由旬と。限ある宮殿におがむたり。亦は蓮華につぼまれて。五百年の間むさ〳〵と月日を送るは。阿彌陀如來の御へだてなさるゝではなひ。參る行者の疑の心からへだてゝ。眞實報土を拜ぬ。寧に參る極樂世界。願くは自力をすてゝ。他力同向の信心に本つき。この度報土往生の素懐をとげよと。〳〵れ〳〵御勸化あられたを。「報化二土正辨立」と御意なされた。

極重惡人唯稱佛。我亦在彼攝取中。
煩惱障眼雖不見。大悲無倦常照我。

斯の御文は往生要集。念佛證據門に。觀經を引かせられ。「極重惡人無二他方便一。唯稱二彌陀一得レ生二極樂一」と御釋なされた文を據として。顯し給ふた〻今の偈頌にてある。眞「極重惡人」とは。涅槃經に「犯二四重禁及五無間業一。名二極重惡人一」と御說きなされた。四重禁とは殺生。偷盜。邪婬。妄語の罪。これを四重禁と名けて。末世の凡夫いづれも目鼻の如く身にそなへてゐる。五無間業と云ふは。父を殺し母をころし乃至佛の身より血を

○極重惡人の釋

○五無間業

殺父害母、破和合僧、出佛身血、殺阿羅漢、破羯摩僧之れ也

出す。この五逆罪は。無間地獄の業ぢやに由りて。五無間業と名づける。具にいへは十惡五逆のこすことのなひ大惡人を。極重の惡人と云ふ。即ち觀經に御演說なされた。下三品の惡人のこと。其惡人とは他人のことではなひ。我等が身の上が取もなをさず極重惡人。無他方便と云ふは。一代の說教。定散の法門。自力修行の教にはみな漏はてゝしまふて。療治の手のつきたもの。それが無他方便と云ふものぢや。眞「唯稱佛」とあるは。是れは觀經に下品下生の惡人。始めて知識のすゝめに遇ふて。無間地獄の報をのがれて。一念に極樂へ參ることを御說きなされて。彌陀如來御本願の手づよひ御手柄のほどを顯はされた。日頃佛とも法とも知らす。況んや地獄極樂未來の昇沈。かつで以て心にかけず。後生何とも思はす。たゝ放逸無慚にして。天地の間に置き處のなひ五逆罪迄をつくり。夢にも後生を知ぬものが。無常のあらしにさそはれ。臨終いまはの時になて。恐ろしや目の前に地獄の相があらはれ。牛頭馬頭。阿防羅刹の異形の獄卒。てんでに

○唯稱佛の釋

○臨終云云これは觀經下々品の說

相なり委くは經文を見よ

貴道具を持ちて迎ひに來た時。この人病苦は二段。指あたりて地獄のせめ苦が肝にこたへてくるしふなる。そこを觀經に『此人苦逼不遑念佛』と說かせられた。其段になては法義のありがたひこと云ふて聞せたとて。所詮耳へもとゞかず。たゞこはや苦しやと。眼をすへてもがきくるしむばかりぢや。然るに其時妻であれ子であれ。勸むる人が其場の知識。耳もとに立ちより。何箇なしに南無阿彌陀佛〳〵と勸る聲が。かすかに耳の底にとゞくと。そこが不思議。ちやうど目をさはした者に。氣つけを一口吹きこめは。それが心もとへとゝくと。其まゝ甦へるやうに。『如レ是至心令二聲不絕。』くるしひ息の下から。南無阿彌陀佛〳〵と稱ふるうちに。忽ち地獄の相は見うしなふて。『見二金蓮華一。猶二如日輪一』金色の蓮花が。光明赫奕として目の前にあらはれ給ふ時。病人忽ち苦み止て。ねふるが如く息たへたれは。『即得往二生極樂世界一。』そのまゝ阿彌陀如來の御前へ參らせて下さるゝそと御說きなされたが。觀經の說相にてある。そこを『極重惡人唯稱佛』と御示しなされた。平生の機は『正定之因唯信心』と敎にて。雜行すてゝ彌陀を賴め。自力をすてゝ信心をにより。信心ばかりで極樂參りするぞと御勸化なし下さるゝは。さまゝの計ひをすてさせて。信心に本づかせたふ思召す。平生業成の御勸化。さて臨終々焉の時に及んでは。雜行の段でもなし。計ひの段でもなし。苦しひあまりに。たゞ御慈悲にすがるばかり。そこを御經に『如是至心』と御說きなされて。一念の信心內にささし其時はや御助けにあづかりた。其賴むすがたが口にあらはれて南無阿彌陀佛。南無阿彌佛陀。苦にせめらるゝ臨終際。信の行のと云ふ沙汰に及ばすたゝ耳もとで念佛をすゝめるばかり。そこが願力の不思議で。どのやうな苦しひ中からも南無阿彌陀佛とあらはれたが。やがて往生の定り時そ。この御手筈は阿彌陀如來の御計ひ。そこを『極重惡人唯稱佛。』今はの時に及んでは。何箇なしに南無阿彌陀佛そと御すゝめなされた。『我亦在二彼攝取中一。煩惱障眼雖不見。大悲無倦常照我』とは。往生要集の雜略觀

○我亦在彼等三句の釋

のこゝろを顯はされた。雜行すてゝ一念に彌陀を賴む行者は。つねに如來の攝取の光明の中にすめども。盲目の日に照されなから。日輪の體を見ることのならぬ如く。且ても暮ても。光明に照されてはゐれども。婆婆にゐるうちは。其光明をおがむことかならぬ。譬喩へは子が十月母の胎内に居ながら。母の胎内を見ることかならぬは。未目のあかぬゆへぢや。我等光明の懷に育られなから。その光明を拜まぬは。智惠の眼が開けぬゆへぢや。其一段は篤と聽聞して疑ひはせねども。むかし〳〵の知識高僧方は。御德がすぐれてましますゆへに。さぞかしつね〳〵如來の光明を拜ませらるゝで有ふと思ひさふなものぢや。そこの處を惠心僧都御氣を付けられ。必す奥ゆかしふ思ふて羨むな。我も亦かの攝取の中に在りて。煩惱眼をさへて見ることあたはす。光明をおがまぬは後の世の衆生ばかりではなひ。我も亦同しこと。何なれは煩惱に眼をさへられたゆへぢや「如二牆レ面而立ツ二」と。我目はあひて見ることは見れとも。壁や障子がへだてると。向は見

○胎内にある喩

○牆に面して立つ喩

○たれこめて　古今集に曰くたれこめて春のゆくへも知らぬ間に待しゐもうつろひにけり

○和讃　高僧和讃の文なり

ぬ。たれこめて春のゆくゑをしらぬと云ふは。病氣などにさへられて。奥の一間にとぢこもり。庭に咲た花を見ずにしまふは。壁や障子にへたてられたゆへぢや。今銘々の身も。光明の御座鋪に樓ひし。信心の眼は具へながら。煩惱の戸障子に隔てられたゆへ。往生の春のゆくゑを知らすにゐるのぢや。しかし見ることがならぬとて。必す疑ふな。「大悲無レ倦常照レ我。」こゝを御和讃に。「煩惱にまなこさへられて。攝取の光明みされとも大悲ものうきことなくて。つねにわか身をてらすなり」と御意なされた。ものうきことなくとは。退屈せぬことぢや。論語に「敎レ人不レ倦。」これは孔子の申し置かれた言で。我はさしたる取得はなけれとも。人に學問の道をおしへて。つねに退屈すると云ふことはなひと宰された。ものを敎ゐるにも。器用な弟子は敎ゐることが利に由りて。師匠が退屈せず。無器用ものにあふては。いかな師匠も退屈するか。孔子は聖人ぢやに由りて。どのやうなものでも。道が習ひたひとさひいへは。夫れを賞玩して。どれはと同

しことをくりかへし云ふて聞せても。うとましふ思ふことはさらくなひと申されたことぢや。今阿彌陀如來の光明に照らされて。常に御ひかりを拜かみ。いさみ進むて御恩を喜ふことは思ひもよらず。常住照されて居ながらそれとも知らず。大事の御恩をわすれて暮す。我等がやうな無器用もの。其中からも喜號をとなへて。ほそくにも御慈悲をたふとめば夫れか御好の阿彌陀如來。ふかく喜ひましくて。我等が方には拜まねとも。拜まぬがうとましひとは思召さず。娑婆逗留の其間は。しばらくも御油斷なく照し護て下さるゝ。

○法然上人の事

本師源空明佛教。憐愍善惡凡夫人。
眞宗教證興片州。選擇本願弘惡世。

七高僧第七番目に。御開山の御師匠法然聖人。御實名を源空と申し奉りたすなはち美作國久米南條稻岡莊漆間の時國の家に生れさせられ。御とし十三にして叡山に登らせられ。肥後阿闍梨源光を師匠と賴み給ひ。十五歳で御出家をとげられたが。十八歳の時深く世間の名利を厭ひ給ひ。叡山の黑谷に御隱居なされ。又慈眼房叡空を師匠となされて。天台眞言は申すに及はず。廣く八宗の奧義をつくして。御學問なされたれとも。未た後世の一大事を思ひわきまへ給はぬに由りて。何の處にか末代の凡夫。心やすふ生死の迷をはなるへき道やあらんと。一切經を五返まてくりかへして御覽なされたれとも。猶未たこれぞと見きはめ給ふこともなかりた。眞しかる處不圖惠心僧都の往生要集の御手引から御氣がつひて。善導大師の觀經の疏を數返御覽なされたれは。八返目に至りて。かの散善義の「一心專念彌陀名號。行住座臥不問時節久近。念々不捨者是名正定之業。順彼佛願故」とある釋文にゆきあたらせられ。さてもくありがたや。我身の上は云ふに及はす。末代の惡人凡夫が。出離解脫の要法。この道一つに極りたりと。御年四十三歳の時。始めて他力の安心を御決定なされた。夫れより叡山黑谷を立ち出て給ひて。東山吉水に御禪坊を構へさせられ。念佛往

○法然上人念佛門に入り給ふ因緣

生の道を弘め給ひてあれは。上は一天の帝を初め奉り。下は賤男賤女に至るまて。御歸依申さぬものはなかりた。其御すゝめの要をいへは。機は十方衆生。心はたすけ給へと思ふはかり。行は一念も十念も。みな決定往生なり。兎角自力をすてゝ。彌陀を頼め。雜行をやめて念佛申せ。往生決定疑ひなひぞと。善人惡人おしなへて。本願の御慈悲をつたへさせられ。念佛往生の大先達となり給ひたと云ふことを。「憐愍善惡凡夫人」と御意あられた。○眞宗の釋

○散善義これは散善義結尾の文なり

「眞宗敎證興片州」。選擇本願弘惡世」とは。「眞宗」とは他力眞宗の義で。善導大師の散善義に。「眞宗叵遇。淨土之要難聞」とありて彌陀を頼むて極樂參りするを。眞宗と名付けられ。又法照禪師の五會法事讃に。「念佛成佛是眞宗」と御示しなされた。すれは何れも雜行雜修をすて一念に彌陀を頼むはかりで。佛になるぞと決定する心底が。直に淨土眞宗と云ふもの。法然聖人專らこの旨を御勸化なされた。「敎證」とあるは具にいへは。敎行信證。如來の本願をおしへて。往生の正業は南無阿彌陀佛は

○敎證の釋

かり。念佛もとなへて回向するではなひ。往生は願力不思議で參らせて下さるゝぞと信して。疑ひはれたが信と云ふもの。この信を以て念佛申すはどのものは。みな淨土に往生して。彌陀同體のさとりにかなふが證の字のこゝろ。これを眞宗の敎證と云ふ。「興片州」とは。片は木片なりと云ふて。こつは屑のこと。この日本國は。唐天竺に比へて見れは。至極の小國殊に地脉と云ふて。道すぢも海に隔りてきれてある。いはゝ斬斧で木をはつゝた一枚のこつはが大海に浮むでゐる如くぢや。それで此の國を片州と云ふ。天竺唐には道すぢ切れ。海を隔てゝのはなれ國なれども。ありかたひは如來の御慈悲の血脉がきれ給はぬに由りて。海をへだてた西天からたふとひ佛法が渡らせられ。殊に此の國の衆生は。阿彌陀如來に契ふかく極樂淨土に御緣が厚いに由りて。「智慧光の力より。本師源空あらはれて。淨土眞宗をひらきつゝ。選擇本願のへたまふ。」大勢至菩薩。極樂淨土よりわさ〳〵あらはれ出させられて。如來の本願を弘め給ひ。末代惡世の我等

○興片州の釋

○智慧光云云高僧和讃の文なり

○選擇本願弘惡世の釋

迄が。極樂參りの先途を見とゞけ下さるゝを。「眞宗教證興片州」と御勸化なされた。「選擇本願弘濁世」とは。選擇本願は第十八願。即ち法然上人この十八願のまゝを。選擇集十六章段にあらはされて。自力をすてゝ他力に入れ。雜行をすてゝ彌陀を賴めと。念佛往生の義をあくまで御のべなされた。彌陀經に「當知我於五濁惡世。行此難事。得阿耨多羅三藐三菩提」と御演說なされて。我この五濁惡世のわるひ處へ。大聖釋迦牟尼如來と名のりて出たは。大底の苦勞なことではなひが。何の爲めなれは。この難信の法。念佛往生のことはりを說ふ爲めばかりぢやと。釋尊自ら御意あそばされた。今法然上人も其の如く。この末代惡世に出て給ひ。さまざまの御苦勞をなされ。御年七十五の時は。流罪にまで御あひなされたが。

○西國法然上人は承元元年藤井元彦と名を改め土佐國幡多に流され給ふ

「我不レ由レ謫 爭 弘ニ專修之道於海裔一。是一化之幸也」と仰せられたれは念佛ひろめたが過に成りて。この度都の地を追ひはなれ。はる〳〵西國へ流されゆくが。七十五に成りての流罪左遷。たゝしすくなひことなれとも。しかし斯したことがなくは。西國へ念佛が弘まるまひ。馴染の王城をはなれるは悲しけれとも。法義取りたての爲めには。大きな仕合せことぢやと御よろこひなされた。箇樣に御苦勞なされ。御身にかへて如來の本願を弘め下されたはどに。各々今日ては疊の上に膝をならへ。極樂參りの一段。心やすふ聽聞するやうに成りたは。偏へに本師聖人御苦勞の大庇ぢやはどに。其御恩をしれとて。「選擇本願弘惡世」と御示しなされた。

還來生死輪轉家。決以疑情爲所止。

○生死輪轉家の釋

是れは元祖聖人の選擇集に。「生死之家以疑爲所止。涅槃之城以信爲能入」とある文に依らせられて。疑をいましめ信心を勸め給ふ偈頌のこゝろにてある。「生死輪轉家」とは。我等が三界六道の迷を家に御たとへなされた。生死とは具さにいへは。生住異滅の四相。一りんの花にたとへてもひたところは生。しばらくこたへてある間は住。二三日もすれはうつらふて花の形が損じるは異。はどなく風にさそはれて散てしまふた處は滅と云

ふもの。人間一生が其の如くで。生れ出た處は花の咲たやうなもの。須臾婆婆に逗留の間は住と云ふもの。年より齢かたふひて。體の樣子のかはるは異。息のきれた處が滅。是れを四相遷流と云ふ。つゝめたれは生死の二つ。たれか百年の形體をたもつへきや。我れやさき。人やさき今日ともしらずあすともしらす。何なる達者ものでも。死ぬることばかりはのがれはなひ。此人間にかぎらす。三界六道廿五有の衆生。みな生死の苦をまぬかれす。こゝに死しては彼に生れ。かしこに死んでは此に生れ。「ゆき〳〵て本のかきねや蝸牛。」三界九地の間を。くる〳〵せはりて。迷ひにはてしのなひことを。車の輪のめぐるに御たとへなされ。この三界を常の棲として離るゝことのならぬを家に比へ給ひて。「生死輪轉家」と仰せられた。「還來」の二字は。かへりきたる。「三恒河沙の諸佛の。出世のみもとにありしとき大菩提心おこせども。自力かなはて流轉せり。」生死永劫永い迷の間。恒河沙數の諸佛の出世にも遇ふて。いでや出離生死と出かけて見たことも度々

○二十五有 四州、四惡趣、六欲天、梵天、無想、卽舍、四禪、四無色これ也

○三界九地 欲界色界四禪天と無色界の四空界となり

○還來の釋 ○三恒云云 正傳未和語

有たれとも。本願不思議を疑ふて。自力をはたらひたに由りて。に迷をはなれなんだ。然れは根本この疑か迷ひの繫業になるそと。法然聖人御定めなされた。凡そ疑と云ふものは。欲界十煩惱の一つで。凡夫の身としてはどうしても離れることのならぬものぢや。「疑事之賊」と。外書の中にもいましめて。世間に盜賊をいやがる如く。疑と云ふものは諸事に付ての姦賊ぢやとたとへてある。實にや其物につひて其物を殘ふは。國の賊。家の鼠。身の虱。いづれも人の否かるものぢや。今疑を嫌ふことは。ちやうど國の賊の如く。家の鼠の如く。身につひた半風の如く。何んでも善事の邪魔をするが疑の一つぢや。夫ゆへ善導大師は。「若人於斯生疑。縱令千佛國遶無由可救」と御意なされて。興設へは寵愛の子が熱病をやむて。熱におかされて親や兄弟を讎敵と思ひ。すゝめる藥や食物を。毒をのますと合點して。親兄弟。親類。眷屬の。より傍ふて看病するを。こはがりて寄つけぬやうにするがあるものぢや。今がそれで。釋迦彌陀は慈悲の

○十煩惱 貪、瞋、痴、慢、疑、身見、邊見、邪見、見取見、戒禁取見

○善導大師散善義の文なり

○龍子熱病の喩

父母。二尊の御慈悲は父と母。三世十方の諸佛如來は。一門眷屬の如く。煩惱業障の重き病にうち臥して。前後もしらずくるしむを。不便のことに思召し。釋迦彌陀の父母は。こゝにやりかしこに喚ひ。我等が影身にそはせられ。何にもして無明淵源の病を本復させたや。何とぞ金剛那羅延身のすこやかな覺の身となしてやりたやと。大悲の御胸をくるしめさせられ。十方の諸佛如來は同勸同證の御心を合され。我等につきそふての御看病。御すゝめの藥は南無阿彌陀佛。若さて衆聖一同に。御心をつくし給ふ處に悲哉。無明疑惑の熱におかされて。大切な如來の御慈悲をあやふみ。本願の不思議を疑ふて。他力の念佛を自力に取りなしたは。藥を毒と思ふ如く。去るほどに親は云ふに及ばす。一門一家もろともにどうぞして本復させたひと願ひのぞむは山々なれとも。病人が否がりて傍へよせつけねは仕樣がなひ。自の怠懈を以て法の失と爲すこと莫れ。如來の御慈悲に御油斷はなひ。諸佛の御まもりに御手ぬかりはなけれとも。何ほど云ふても語り

○玄義分に曰く彼喚此道豈容不去也

○金剛那羅延身　那羅延は梵語にして茲に極大力士と云ふ

ても。今日今時たゝ今まで。我等が疑の熱がつよふて我れと彼尊の御手をはなれ。大悲の方を余所に見て。自業自得の道理の前。三界生死の迷ひの巣守とはなり下りた。そこを「還二來生死輪轉家一。決以二凝情一爲二所止一」と仰せられた。爾次に「速入二寂靜無爲樂一。必以二信心一爲二能入一」とあらはされたは速は速疾。手はやひこと。入は證入さとること。賴む一念に手はしかう凡夫の身をすてゝ。光をはなつ佛になるは。たゝての信心一つぢやと御示しなさるゝ心ぢや。「寂靜無爲樂」とは。寂靜無爲共に涅槃のさとりの異稱で。煩惱の喧聒ひことの止たが寂靜。娑婆のやうな有漏雜業のこしらへものではなひ。無爲自然のさとりから顯はし給ふ極樂世界。それで無爲の樂と云ふ。樂の字をみやこと訓すは。樂は音洛。もろこし周の世に都せられたは洛陽。それにならふて日本でも。平安城を亦は洛陽と云ふ。諺にすまは帝都と云ふて。王城の土地ほと勝れたことはなひ。「邦畿千里是民之所止。」流石帝王の住み給ふ處なれは。各別土地がすぐれて。風流繁華

○速入の釋

○寂靜無爲樂の釋

○邦畿云云　大學の語なり

○さゝなみや云云 平忠度の歌なりさゝなみは志賀の枕詞なり

○建立云云 大經の文なり

天下にならびはなひ。併し「王宮是火宅」と。古人のいひし如く。「さゝなみや志賀のみやこは荒にしを。むかしなからの山櫻かな。」唐も皇和もだびく〳〵の都うつし。宮も倭屋もはてしなければと。たゞ何事も定めなき世は芭蕉葉の夢の戯る。一つとしてまことなければ。玉輝い都のすまこひも。あてことにはならぬ。然るに極樂の樂はこれとかはり。法藏菩薩のむかしに。「有爲轉變とうつりかはる無常遷流の世のありさまを嫌はせられ。「建立常然無衰無變。」いつもかはらぬ涅樂の眞樂。阿彌陀如來の御さとりの有の儘が。やがて極樂世界とあらはれ給ひたれは「桑田變爲海。」天地は幾たひ變ふとも。極樂世界は常住のさとりの樂。甍をあらさふ宮殿樓閣。池には八德の水をたゝへ。林には金銀瑠璃の花を咲かせて。恢廓廣大のはとりもしれぬ覺のみやこへ。已今當の往生人。十方佛土よりされる。絡繹らす參る衆生。のこらす佛果のさとりを極め。但受諸樂の御馳走にあふていつ迄もつきせぬ目出度い果報をゐさせ下さるゝ。若るたゞひさとりの

○必以信心爲能入の釋

境界を。「寂靜無爲樂」とは名つけさせられた。「必以信心爲能入」とは。凡そ內外の兩典にわたりて。信と云ふものは何れ欠てならぬものちや孔子の「無信不立」と敎へられて。事に由りては三度の食物はくはずにも居やうが。人として信なくては片時も立ぬと申された。況んや佛法の大海には信を能入と爲す。佛法では別して信心か肝要ぢや。しかし今の信は一代諸敎の信を敎へ給ふではなひ。他力回向の佛智の一念を御すゝめなされた。其姿はもろ〳〵の雜行雜修自力の心をすてゝ。今度の後生助けさせ給へと。如來を賴み奉る一念の信心が。極樂參りの通り手形。我もひとも此信心に本つきゐれは。生死の迷は今生かぎり。何時でも一息切斷。娑婆の因緣つき次第。寂靜無爲の樂に生れ。無上佛果のさとりをゐさせ下さるゝは。たゞ信心領解の身のうへぢや。

弘經大士宗師等。拯濟無邊極濁惡。
道俗時衆共同心。唯可信斯高僧說。

○弘経大士宗師等の釋

○極濟無邊極濁惡の釋

○道俗時衆

此の二行四句は。正信偈一部の結完。六十行百二十句の偈文を。この四句で結ひとめさせられ。御流をくむ御門下の輩わきひら見ず。この七高僧の御勸化を信じて。往生を安堵せよとある秖今の御示し。「弘經大士」とは。弘經は淨土正依の御經に依て。他力往生の御安心を弘め給ふこと。大士とは天竺て龍樹菩薩。天親菩薩のこと。「宗師等」とあるは。支那では曇鸞大師道綽禪師。善導大師。我朝では源信和尚。法然上人。等は向内等で。外に念佛の知識もかず多くましませども。第十八願佗力往生の道すぢの立た御勸化は。たゞこの七高僧ばかりぢやに由りて。すぐりたてゝ外は御ませなされぬ。『拯濟無邊極濁惡』とは。彌陀の本願は汎く十方衆生を御あひてになされとも。其中に極濁惡といはれて。外に助かるべきたよりのなひ惡人凡夫を。第一の御目あてとなさるゝが。彌陀の本願ぢやはとに。其本願をたのめと。他力往生のことはりを懇ろにをしへて。無量無邊の極重惡人を拯濟なされて下さるゝが。この七高僧の御化導ぢや。『道俗時衆共同心の釋

○不相應行是には非色非心不相應行法と云ふ大乘にては心法の分位とすなり

○曾我兄弟の事

衆共同心」とあるは。佛に四部の弟子と云ふて。比丘。比丘尼は出家の御弟子。これを道と云ふ。優婆塞。優婆夷は在家の御弟子。これを俗と云ふ今如來の本願は。出家在家の御区らひなく。姿形にはよらぬ。たゞ彌陀を願むものが佛になるぞとしらせて。おし並へて道俗と喚かけ給ふ「時衆」とは時は不相應行の一つで。御開山御年五十二歳で。この正信偈を御つくりなされた。其御在世にめくりあふた同行なれは。夫が其時の衆生と云ふもの。御筆を援りて書きのこし給ふは。後の世の衆生の爲めぞと聽聞すれはたゞ今この御座へあつまられた中で。頭をそりさまをかへた身分は道。世を張りてゐる男子女人は俗。それを道俗時衆と仰せられた。「共同心」とは總々が心を同しふすると云ふこと。『周易』に「二人同レ心其利斷レ金」と云ふて。互に心を合すと云ふが强ものでは。落魄た涙人の身ながら。曾我兄弟たゞ二人。親の仇とつけねらひ。其時分のれき〳〵の大名工藤祐恒を打ちて本望を遂けた例もある。御流をくむ同行も。領解がわれ〳〵では。往

○唯可信此高僧說の釋說

○百丈禪師野狐を化すること

生の本意はとげられぬはどに。雜行雜修の心をすてゝ。一念に彌陀をたのみ。共に一味の信をゐて。總々うちうるはふて。此の同眞實報土の往生をとげよとて。「道俗時衆共同心」と御すゝめなされた。『「唯可信此高僧說」』とは。和漢兩朝に亘りて。念佛の祖師等も多けれども。外の人師の勸めには據るな。たゞ此の七高僧の御勸化ばかりをたゝふとべとあること。「高僧」とは御德の高い聖人方のこと。「我是故佛極樂大士靈山聽衆。」本國とゝへは何れも極樂。釋尊靈鷲山御說法の會座にも影向衆となてあらはれ給ひた。みな御歷々ぢや。其御れき〳〵方が世々に出現あつて。他力弘願の法を御相承なされ。末の代の我等へ御聞かせ下されたはありがたひ。『在昔もろこしの百丈禪師は。禪宗の大德であたが。ある時一人の僧來り。禪師に相見して申すやう。私儀は常の人間に非す。年久しくこの山に棲む野狐にて候が。本この寺は迦葉佛の遺迹より傳はりての古地。乃ち私し五百生以前はこの寺の住持にてありし處。有る人參りての尋ねに。「大修行底者落二因果一不」と言ふたゆへ。取あへす「不落因果」と應へました。この對やうのわるさに。聞たものは地獄へ墮在いたす。私は畜生道におちさして五百生を歷て。未た畜身を轉じませぬ。何とぞ一句を授り。御蔭に由りて畜身をのがれたふ存じまするとと。涙にかきくれ申しけれは。百丈禪師。聞かれて。いかにも汝か爲め二句を授けん。汝むかしの問者に代りて。我に向つて問へと申されたに由りて。かの狐畏りて。「大修行底の者因果に落るや否」と問ふたれは。「不昧因果」と應へられた。狐この一言で。忽ち大悟發明し。御蔭て畜身を轉じまするとと。三拜して歸りけるが。却後再ひ來ふぬに由りて。弟子に命し。夫の野狐命終したに極りた。山中を探し來れと申し付られたに由りて。弟子共大勢手わけして尋ねたれは。果して尻のはげた狐が死んて居た。さてはこれこそと。死骸をもち返り。住持の禮を以て念比に葬むられたと云ふことがある。人に敎ゆるは大事のものちや。最初大修行底のもの因果に落つるや否やと尋ねた意は。大修行底の人とは

○見性悟道歩船鈔に曰く無性無住なる義を解了するを解悟と名く此解によりて修行して其心の分別を忘れて空寂の理顯はるゝを證悟とす其正しき證悟の一念を見悟成佛と云ふなり

禪宗の知識。あつはれ見性悟道したと云ふほどの身分では殺生したり妄語つひても罪にはならぬかと云ふ尋ねぢや。其問にこたへて。「不落因果」と云ふたは。いかにも大悟徹底の人なれは。少々罪つくりても報は受ぬと云ふ答へぢや。この返答がわるかりたゆへに。聞くものは地獄におち。說いたものは畜生道に墮し。五百生狐となりた。然るところ百丈對を改めて「不昧因果」と申されたは。因果にくらからすと云ふこと。本が殺生したり虛つひたり。さは〳〵不善するは。善惡因果の道理を知らぬからぢや。因果業報響の聲に應するが如くなれは。卽今いかなる知識にもせよ。上人にもせよ。惡ひことしたならは。針ほどの穴から。棒ほどな風のくるやうに。些とでも罪を犯したらは。決して報を受ねはならぬ。然るにかの知識ともいはるゝ人は。かの因果の道理を能くわきまへ知てゐるほどに。いかな針でつひたほども。惡ひことはせぬ。是れは因果に昧がらぬゆへぢやと云ふ對で有りた。其示しに由りて。狐が始めて得道したと云ふことが傳燈錄に

見えた。人に敎化するは大事のものぢや。かの狐五百生のひかし。たつた一言で人を惑はし。其身も畜生に墮ちたとある。併し是れは凡夫ぢやに由りて。其の間違か有りた。然るにこの七高僧は。みな大權の御れき〳〵。如來の直說に相かはらぬからは。何れも信じて信じそこなひはなひぞ。併しこの七高僧の御すゝめにも。對機により隨他方便の御おしゑもあるに由りて。案內しらぬ身では。間違が出來まひものでもなひ。夫ゆへ七高僧御勸化の中では。肝要の處を擇たして。この正信偈に載せ置いたほどに。必ず余の說に聞きまどふな。唯この七高僧の。この御勸化を信し奉れとある御丁寧な結勸で。「唯可レ信二斯高僧說一」と御筆をとめられた。

正信偈勸則終

明治廿九年二月二日印刷
同　年同月七日發行

版權所有

標編纂兼註者　大和國宇佗郡室生村字原山第十二番地　佐々木惠璋
發印刷兼行者　京都市下京區下珠數屋町東洞院西入橘町八番戸　西村九郎右衛門
發行者　京都市下京區五條通高倉東エ入盤龍町三番戸　澤田友五郎
同　京都市下京區寺町通五條北入橋詰町廿五番戸　藤井佐兵衛
發行所　京都市下京區油小路御前通下ル玉本町　興教書院

佛書出版
京都佛教書院